
双銃

天照 暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双銃

【Nコード】

N9675E

【作者名】

天照 暁

【あらすじ】

現在、加筆修正の改訂シリーズ中。

現在、甘々編！

ボケ、ツッコミ、恋愛、おふざけ、ガンアクション！！混ざりに混ざりまくった学園物語。なぜか、作者も登場。毎週土曜日、更新中。公式HPは、<http://x115.peps.jp/amats>

e r a s a k a t u k i / ? i d " a m a t e r a s a k a t u k
i & a m p ; g u i d " o n または、 h t t p : / w w w . f r
e e p e . c o m / i . c c g i ? a k a t o k i まで!!

#001:どんな急展開でも冷静が大事!!!

(ナレ:佐)

私は、この国は平和な国だと思っていた。あいつが来るまでは。

(鬼) 「俺は中学二年生、鬼帝^{きてい}戊流^{ぼる}。あとは、作者の設定を聞いてくれ。」

(作) 「おいおい・・・えーと、タイから転勤してきた。その前は、ロシアにいた。ちなみに最初の言葉はあとで登場してくる、佐藤^{さとう}藤彩^{とうあや}の声である。」

(鬼) 「いいから話を先進めて!!」

(作) 「お前が説明せい言うたんやる!!! だいたい何で作者が出てくんねん、話に!!! まあいいや、先に進で!!!」

新学年 教室

「キーンコーンカーンコーン」

(富^{うた}) 「はよ席付け!!!」 私のクラス、2年8組の担任、富士剛^{ふじこう}田^{うた}だ。

私は外を眺めていた。学年があがったからと言って、何も変わることは無いし、普通で平凡な暮らしをしていた。だけど、なぜか優先順位8番目のこのクラスに転校してきたあいつのおかげで、私の人生は大きく変わった。

(佐) 「こんだけ言っとけばいい? 作者!!!」

(作) 「おめーもかよ。第一、何で呼ぶの? 作者を!!! 普通、無いよこんな光景。」

(佐) 「先進めて!!!」

(作) 「又かい！！もう呼ぶなよ！！自分の出たい時にでるから。」

教壇に富士先生は立ち深呼吸をして言った。

(富) 「今日は、転校生がいます。入ってきて。」 そいつがあいつだった。

(鬼) 「鬼帝 戌流といいます。これからよろしくお願いします。」

軍人のように礼儀正しく、顔も悪くはなかった。

.....

ここで、皆さん、変だと思いませんか。進級したら、やっぱりクラス替えがあつて、その時転入生がいても前で話したりはしませんよね。

しかし、我が道前中学校のクラス編成の先生は、面倒なことが嫌いなため、クラス替えがないのです。他校がうらやましい。

その時、先生が言った言葉に不意をつかれた。

(富) 「じゃあ、佐藤の席の隣に座つて。」

一旦、脳が停止していた。

脳の回路が再びつながれた頃には、嬉しさに満ちていた。なぜなら、生まれて今まで、転校生が隣になったことが無かったためである。席替えしてもよく知る五人ぐらいが順番で隣になっていたなあ。そして、鬼帝がこっちに来る。少しわくわくしていた。でも、横に座った瞬間、寒気というか、何というか、こいつには体温がないのかと思うぐらい、寒さを感じた。それは、悲しく寂しいものだった。

- 休み時間 - (ナレ: 鬼)

考え事をしていると、隣から声をかけられた。(佐) 「鬼帝は、

前どこにいたの？」

なれなれしさが、少し頭に来る。

(鬼)「タイだ。」

短く答えたが、食いつかれてしまった。

(佐)「引越し家庭？」

(鬼)「まあ。」

(佐)「分からないことがあったら、聞いてね。」

この国の人達は本当に頼りたい者ばかりだ。

(富)「おや、お二人さん仲がいいねえ。」

富士が割り込んできた。

こちらの反応に見向きもせず、続きを話した。

(富)「二人に相談がある。明日の生徒会選挙に出てほしい。」

なぜか、この学校は新学期の始まった次の日に選挙を即日募り、

即日開票するらしい。この事はこの学校に入る前に読んだパンフレ

ットに載っていた。

(佐)「富士先生、私はいいですけど、鬼帝は今日来たばかりで

すよ。」

生徒会とは、学校を熟知した者がやるべきである。もっともな意

見である。

(富)「何も慣れだからで心配ない。私のメンツのために。」

先生が頭を下げているのは無視するとして、自分の動きやすさを

考えると、この方が良くもしれない。

(鬼)「分かりました。」

(佐)「えー……」

-翌日-(ナレ:鬼)

俺と佐藤は、出馬することになった。8人出馬していた。結果は、

2年3組、武田弘たけだ ひろが会長。2年4組、濱田太郎はまた たろうが副会長。1年8組、

久保田淋くぼた りんも副会長。残り、俺と佐藤と2年7組、越智太郎おち たろう1年5組、

岡田千治おかた ちはるが実行委員としてえらばれた。何となく作者に『もつと濃

く書け!!!』と言ってやりたいぐらいだった。でも、又怒られるの

もいやだしやめておいた。だが、まだこの奴らは俺の裏の顔を知らない。元ソ連軍暗殺部隊に属していたことなど。悲劇の日々になるとつすつす感じていた。

#001：どんな急展開でも冷静が大事!!!（後書き）

こりゃ、疲れる話を書いてしまったと思います。

処女作の「ガン・トライアル」（連載中）と平行に作ると疲れます。また、舞台が日本なので、人物名に手間取りました。これを読んでるのは最後まで読んでくれた方々なので、読んでいただきありがとうございます。メール等下さい。さて今回は、生徒会に入った鬼帝と佐藤、妙なテンションの他の生徒会に巻き込まれていきます。#002：誰か一人滑るとあと滑る。お楽しみに。

#002：誰か一人滑るとあとも滑る

教室（ナレ：佐）

「ピン、ポン、パン、ポン」

校内にアナウンスが流れる。

（富）「生徒会の皆さん、今日放課後、生徒会室へ来てください。終わり。」

富士先生の放送は毎回変だ。基本、最後の『終わり』って何？と毎回思う。

「いらないでしょ。」

独りでアナウンスに対してツツコミをしていた。

（鬼）「生徒会室とはどこだ？」

そうこう考えていると、横から話しかけられているのに気づかなかった。

（佐）「……………」

（鬼）「佐藤……………」

顔は完全にボーっとしていた顔だったと思う。

（佐）「えッ．．ああ、生徒会室ね。案内する。」 さっきの富士先生の話とは変わるが、気になっていた。

あいつの鉄のように冷たい気配が。あいつの半径50センチに入るまでは、見ていない限り気配がないのに、その中に体の一部が入ると全身が氷の針で刺されるような冷たく、悲しいものに包まれることについて。

- 放課後 - （ナレ：鬼）

こういった、よく知らない場所での基本動作は情報収集である。

（鬼）「残りのメンバーは、いったいどんなやつだ？」

すると、佐藤はまた人の話を聞いていなかった。

(佐)「・・・・・・・・」

(鬼)「佐藤？」

ようやく、気付いたようであたふたしていたが、すぐに落ち着いていた。

個人的なこいつに対する感想は変な人である。

(佐)「えーと・・・・説明するよりあった方が分かる。」

先行して佐藤が生徒会室の戸を開けた。

「ガラガラガラガラ」

入るとまだ一人も来ていなかった。

(佐)「まあ少し待ちましょ」

- 10分後 -

この気まずい空気は何だ。早く誰か来てくれと何回も心の中で叫んでいた。

作者もずるい。

二人つきりほどきまざることがないのに、わざわざこの展開にしようがって。

(鬼)「おい作者！おい作者！！いい加減ボーとしてないで人出せよ。特に会長ださないとどんだけグータラな会長なんだと思われても、しんねーぞ。」

(作)「いい加減話しかけないでくれないかな。こっちは他の編集が残ってるの。」

(鬼)「他作品の宣伝しやがった！！第一、何でソ連がらみが多いの？」

(作) 「いいじゃんか!!第一こっちは、作者いじりすぎだろ!!」
(鬼) 「はいはい。いいから続きを書いて。」
(作) 「二話続けて同じ下りは、まずいだろ!しょうがない続きを書くか。」

私たちからすれば、作者が書き進めると言うことにより、横の方から黒子が出てきて、出演者に追加の台本が支給される。この光景を文字でしかお伝えできないのが残念である。

すると、会長、武田弘が来た。

(武) 「イエーイ!!!あら二人!?!?」

こいつには果たして、この学校の生徒を導く力があるのか甚だ疑問である。

待たされた側の返事といたらこれしかない。

(鬼) (佐) 「遅い!!」

(武) 「すみません・・・ちよつと授業が長引いてて」

こんな滑る会長とやらなければならぬとなると、この先、不安だ。

続いて、1年生の久保田と岡田も来た。さすがに会長みたいなこととはなく、普通に入った。

(岡) 「授業が遅れていたの、遅れました。」

(久) 「右に同じです。」

すると、武田は二人に近寄り、二人の肩をたたく。

(武) 「かまんよう~~~~!!俺も遅れたから。」

会長としての威厳の欠片もない。

次に、越智と富士先生が来た。

すると、武田は急に目つきを変えた。

(武) 「どうしたのかな~~~~?」

(越) 「授業長引いとったんよ。」

メンチを切り合っている、不良にも見える光景だった。武田は、

一様滑るが、面倒見がいいと分かった。

そんな二人を止めるように佐藤は言った。

(佐)「武田が言える立場じゃないし、越智も突つかからない。」
そんな奴らを横目で見つつ、富士先生も事情報告する。

(富)「おくれました。申し訳ない。」

短いが的確である報告だ。先生も非があれば認める素直な人だな
とこの時、感じた。 こういう状況で、忘れてはならないのが、最
後の人間である。

(富)「濱田がいないけど時間がないから始めるよ。」

間に合わなければ、置いてけぼりなのは、どこでも同じだ。

(武)「起立ッ!!」

「ガラガラガラガラ」

武田の号令とともに、戸が開いた。

(濱)「あいうえ、遅れたよ!! ゴメンチョッ」

こんな事で許してもらえないはずがない。

(全)「.....」

やはり、滑りは続く。

あまりにも、無惨な滑りだったので佐藤がキレた。

(佐)「この!! 滑りヤローが!!!! 最近、作者のネタがおもしろくなくて、ストレスが貯まっている時に、くだらんことを言いや
がって!!」

跳び蹴りを食らわした。

同時に鈍い音が響く。

「ゴキッ!!」

(濱)「ギャーーーー!!.....!!」

先が思いやられる。

#002：誰か一人滑るとあと滑る（後書き）

久しぶりの投稿でした。と言っても3日ぐらいのことですが。大変皆様のおかげにより、読者が増えております。心から感謝します。話が変わり、宣伝の内容ですが、本文にも出てきた「ガン・トライアル」も是非見てください。またどんどん読者を増やしたいので、口コミ、紹介などで広めてください。お願いします。

さて次は、滑って入ってきた濱田がねらわれます。マフィアに・・・それを聞きつけ鬼帝+OOが助けに行きます。とうとうガンアクションがでます。

次回、#003：やられる前にまず逃げろ！！
お楽しみに。

だが、あいつが悪い。

すると、慌てた様子で先生が駆け寄ってくる。

(富)「鬼帝！！！！濱田がさらわれた。しかも犯行グループからこんな手紙が。」

先生は転校生に対してなんともブラックなジョークを言っているんだろう。

(佐)「先生下手な冗談を。」

第一、こんな平和な国でそんなことが身近に起きるのは宝くじに当たるぐらいのことだ。

とも言いつつも、手紙の内容が気になるので、横から見させてもらった。

この男、重要人物と分かってるんだ！！！身代金と引き替えに返してやる。

犯人より。

(佐)「うわ！！！！どうする、鬼帝！！べたな要求の仕方をするよ、作者に仕向けられた犯人が、かわいそう。」

二時間サスペンスでももっとました。

(鬼)「又、作者が処女作よりも売れてることを根に持つてるんだろ。」

鬼帝が言った瞬間、あたりが真っ白になる。

(作)「カラー！！！！何作者になに言つとるんじゃ！！！！！！」

作者が二話連続登場。コイツ、作者登場用の特別空間まで作って

いるよ。

(佐)「イライラをこっちにぶつけないでください。」

(作)「別に……」

(佐)「やっぱ思ってるんだ!!まじめにやてくださいよ!!」

(作)「ああ、はいはい……」

(佐)「だれるな!!!!!!」

頭をかきながら、作者は帰っていった。この際、作者がどこから登場して、どこから帰って行くかについては、皆さんのご想像にお任せします。

すると、あたりもさっきの教室へもどる。

(鬼)「犯行グループは、犯罪者が大人数いるグループ中の1グループと思われる。」

鬼帝も本気になっているのか?

(佐)「何で分かるの?」
相手に合わせてみる。

(鬼)「長年の感だ!!」

出ました!理由なしのテンプレート。ひどすぎる。

(鬼)「俺は今から濱田を助けに行ってくる。」
私に背を向けた鬼帝に問いかける。

(佐)「授業は??」

(鬼)「それよりも仲間が大事だろ。」
ごもつともですが。

(佐)「大人に任せておけば。」

そう、私達市民の見方、警察がいるではないか。今、気付くが、何故先生は通報しなかったのだろ?

(鬼)「何となく分かるんだ。警察でも手に負えないことだなと。」

(佐)「何で?」

(鬼)「それはあとだ。身代金の金額は?」

少し、鬼帝の冷たい何かが少し増したように感じた。

(富) 「1万円!!」

(佐) 「安ッ!!子供の夢か!!!!」

状況がどうであれ、ツッコミがないと、これはとんでもないことになる。

(鬼) 「間違いないな」

(佐) 「何が?」

もう、コイツが解らない。

(鬼) 「犯行グループが入っている大規模な組織の名前は、赤鷹だ。」

その名に、一度頭の思考がすべて飛んだ。

(佐) 「えッ・・・あの国際テロ組織の???でも2年前に壊滅したってニュースでしたよ。」

その名はあまりにも近すぎて、あまりにも心から離れる事がなく、一生消える事のない名前である。

赤鷹とは、海賊行為並びに要人暗殺等を行っていた組織の名前である。三年前のテロ事件で有名になった。そのテロでは私の幼なじみの両親も犠牲になって死んだ。しかし二年前、国連が初めて、組織の抹殺を世界に向けて宣言した。これを後に「平和のための暗殺」と言い、総計二百人もの人が暗殺された。この行為に対して、二年経った今でも賛否の意見対立が激しく続く。

(鬼) 「それについては今、はつきりと言えないがそれについても今から行けばわかる。行ってくる。」

(佐) 「私も!!!」

何か引かれるものがあつた。死への恐怖より人を助けることの方をその時選んだ。

(鬼) 「死ぬかもしれないがいいのか?」

(佐) 「かまわない。鬼帝と同じ思考で大切だからね、仲間は。」

そこに校内美人ランキング第一位のクラスメイトで、そして幼な

じみの井練由井が近寄ってきた。

(井)「何の話？私も入れてよ。まさか恋の話？？」
温度差というものを少しは感じ取りましょう。」

(佐)「そんなじゃないよ。」

(井)「だって、大切が・・・て言ってたじゃん。」
どんだだけ、そこに付けたいんだよ。」

すると鬼帝が井練の手をつかみ、

(鬼)「こいつも連れて行く」

(佐)「いいの？ほぼ無関係だよ。」
巻き込むのはよろしくない。」

(鬼)「あれだけ内容知っていたらしょうがない。」

鬼帝の冷たい何かは突き刺すような感じになって四方八方に向かっていた。

(佐)「隠す必要あんの？？」

(鬼)「細かいことは、あとだ！！早く行くぞ。」

鬼帝は、走りながら校門まで行った。

門を出ると、黒塗りの車が止まっており、その車の後部座席に私たちは、乗った。

運転席には、60歳代のおじいちゃんが座っていた。

(鬼)「コール、一番近い倉庫に行ってくれ。」

(コ)「了解いたしました。ここですと、A3倉庫ですね。」

コールと呼ばれる人は落ち着いており、年をとった執事のようなだった。

(鬼)「頼む、急いでくれ。あと、エディに救援部隊と武器の回転式ランチャーを頼むと。」

(コ)「かしこまりました。」

「キュルル」と音を出して、コールと呼ばれる人は車を出した。走り出しこそ、音をたてていたが、酔いやすい私が酔わない運転だった。

(佐)「今からどこに行くの？」

(鬼) 「武器の調達だ。」

一人、由井だけが顔が青ざめていた。

(井) 「ちよつと待って。私も？」

鬼帝は真剣な顔で言った。

(鬼) 「二人ともに言っておく。二人とも今日から殺しの世界に入ってもらおう。」

(佐) 「なんでよ!!」

(鬼) 「機密情報を聞いたからである。」

もう、由井は涙を堪えきれなくなっていた。

(井) 「怖いよう。何でこうなるの？」

半泣き状態だ。

(佐) 「私はともかく、この子だけでも降りさせなさいよう。」
いくら何でも、降ろすべきだ。

(鬼) 「もうねらわれているから無理だ。」

(井) 「それって私たちを?・・・てこと?」
由井は目が点になっていた。

(鬼) 「学校でたときからだ。顔も押さえられている。そして後ろの車がそつだ。」

後ろを見れば、黒塗りの車が追って来ている。

(井) 「つまり戦えってこと？」

私と由井は足がガクガク震えていた。

(鬼) 「一様な。でも、お前らに手を汚させやしねーよ。コール、追跡を断ってくれ。」

(コ) 「では、発射しますぞ。」 後ろのトランクから、ミサイルが発射された。

「シユルルルルル・・・」

「ドガン」

見事に命中し、爆発した。

そして、追跡を振り切った私達は倉庫に着いた。

(コ)「つきましたよ。」

「ガラガラガラガラ」

倉庫に入った。

そこには、キレイに種類別におかれた銃の山だった。

(鬼)「二人ともこれを持つとけ。無線とショットガンだ。お前らにでも扱えるショットガンだ。」

そして鬼帝は、奥の方へ行き、何か探していた。

(佐)「私たちは生きて帰れますか？」

心の中にできた不安をコールさんにぶつけてみる。

(コ)「大丈夫ですよ。あの方が、守ってくれます。」

少し、微笑むように答えてくれた。

(井)「ホントに、私ダメ！！撃てないよう。」

由井は泣きじゃくっている。

(コ)「かまえているだけで、撃たなくて良いです。」

(鬼)「そろそろ行くよ。時間がない。作者くっ！！次回またいじやっただね。」

再び登場。今回は天の声。

(作)「予定が狂うと全体も狂うから・・・ああ、無駄話しちゃったよ。ホント読者の皆さん予告通り話が進まなくてすいません。では、又あとで。」

再び車に乗り、動き始めた。

(鬼)「さっきの手紙に、これまた親切に地図が書いてあった。手紙を裏返すと地図がしっかり書いてあった。」

(佐)「これで楽だね。」ただ、犯人は何がしたいんだ？

(鬼)「ただ、身代金の値段が安いこと、迷子にならないよう地図が入っていること。この二点から考えられることは、相手は殺戮中毒患者だろう。はなから俺ねらいだ。」

ここで一つ疑問が生じる。

(佐)「殺戮中毒患者なのは解るけど、なんで鬼帝狙いになるの？」

(鬼)「それは……」

鬼帝が言い掛けたときに現地に着いた。

(コ)「つきましたぞ。皆さんがんばって。」

鬼帝は何か私達に隠し事をしてっていると、思った。

中に入ると、ずたずたにされた濱田が椅子に縛られていた。傷は刃物によるものだった。

(鬼)「濱田の保護を二人で頼む。」

鬼帝が指示した時、どこからともなく、声が聞こえた。

(犯)「お前らは、完全に固められている。動くんじゃねえ!!!」
反響で始め相手の居場所が解らなかった。しかし、鬼帝は解っていたようで、すぐ後方を向いていた。

(鬼)「ダブル、冗談がげせねいなあ。いつから赤鷹に？」

冷たい。冷たすぎる。明らかに、いつもの冷たい何かが大きさを増している。

(ダ)「お前も分かっているだろう。あの日だよ、あの日。」

この二人は面識があるのだろうか。

(鬼)「銃抜けよ。こっちはイラだってんだ!!!」

ダブルと呼ばれる男は銃に手をかけた。

(ダ)「お望み通り!!!くたばりやがれ!!!!!!」

「バンバンバン……」

#003：やられる前にまず逃げる！！（後書き）

- お詫び -

2つほどお詫びがあります。

1つに内容の変更について

毎回4～5分を目安に製作していましたが予告内容が収まらなかったことを深くお詫び申し上げます。

2つにメールアドレスについて

メールアドレスが異なっておりました。

以上の2点を深くお詫び申し上げます。

これからも末永く「双銃」及び他の私の作品を愛読してください。では、次回の予告。

適地に入った鬼帝達の前に犯人が！！鬼帝はダブルと呼ぶ、この男。そして始まる銃撃戦。果たして鬼帝は生き延びることができるか？又、佐藤と井練に銃の引き金を引かさずに勝つことができるのか。

次回#004：やられる前にまず逃げる！！（延長戦）

#004：やられる前にまず逃げる！！（延長戦）

2007年5月6日（ナレ：佐）

（鬼）「ダブル、冗談がげせねいなあ。いつから赤鷹に？」

（ダ）「お前も分かっているだろう。あの日だよ、あの日。」

（鬼）「銃抜けよ。こっちはイラだってんだ！！！！」

（ダ）「お望み通り！！くたばりやがれ！！！！！！」

「バンバンバン……」

ダブルという男が銃を撃った瞬間、私と井練は目をつぶった。

「バンバン……」

二回目の銃声で私たちは目を開けた。

すると、鬼帝が走りながら銃弾をかわしていた。

（鬼）「こつちもこれで撃つても文句はねえな！！」

1秒の出来事である。空中で弾丸をかわしている最中にリボルバー

式の銃に6発、弾を詰め発射した。

「バキューンバキューンバキューン……」

（ダ）「ぐはッ……」

二つの膝と利き腕の手首を見事に貫通させていた。

（佐）「鬼帝こつちは安全を確保できたよ。」

（鬼）「速く逃げる！！」

（佐）「分かった。井練行くよ。」

（井）「足がすくんで動けない。」

（ダ）「そこだ！！！！」

ダブルは、井練めがけて銃を放った。

「バキューン……」

鬼帝は一発で、その銃弾を落としたのである。

（井）「死ぬかと思った。」

（佐）「濱田、一人で大丈夫か？」

（濱）「上半身が痛いだけだから大丈夫だ。」

(井) 「そんなんじゃないって……」

(鬼) 「二人とも追いてくぞ!! みんなが生き残ったこと祝って、飯でも食いに行くか。」

(佐) (井) 「賛成~~~~!!!!!!」

(鬼) 「佐藤、暇そうだから佐藤のおごりで。」

(佐) 「え~~~~!!!!!!」

(鬼) 「冗談冗談。俺のおごりだ。」

(佐) (井) 「やった~~~~!!!!!!」

そして徒歩30分後……

(鬼) 「いい加減降りてくんないか?」

(井) 「やだ!!」

(佐) 「鬼帝、体力無いなあ。」

(鬼) 「しんどいから、はあ、はあ、はあ、はあ、そのラーメン屋で良いか?」

(井) 「しょうがないなあ。」

「ガラガラガラガラ……」

(大) 「いらっしやい!!! おや鬼帝やないか! どしたん、そんなに疲れて?」

(鬼) 「大将!! ラーメン三つ!! あと、至急、お冷や!!」

(大) 「あいよ!!」

(佐) 「知り合い?」

(鬼) 「一応。で、今日は夜まで語り明かすぞ!!」

(佐) 「学校は?」

(鬼) 「コールに事情説明と特別許可が3人とも降りるように手配してもらった。」

(井) 「これからもやるの?」

(鬼) 「ま、その話はこのままでにして気楽に食べよや。」

(大) 「はい、3人ともお待ちどうぞ様。」

(鬼) (佐) (井) 「いったきまーす!!!!」

#004：やられる前にまず逃げる！！（延長戦）（後書き）

いやあ、今回はガンアクションと少し恋愛に絞った内容になりました。私も作品中に今回でなくて良かったと思ってます。今回も最後まで読んでいただきありがとうございました。

さて今回は、今回本編にでられなかった、エディが登場。ラーメン屋で起こる騒動とは？

次回、

#005：人間の暴走の引き金は0・1秒でも引ける
お楽しみに。

#005：人間の暴走の引き金は0・1秒でも引ける（前書き）

（登場人物）

鬼帝 戊流【ロイヤル・トゥリナツアチ】（主人公）軍人のようなきちんとした態度、そして何事にも冷静でいられる。銃の使い方は、軍の人たち以上。

佐藤彩（副主人公）普通の平凡な中学生生活に少し暇をもてあそんでいた。

井練由井（副主人公）健気な心を持つ。少し鬼帝に片思い気味。

ダブル（赤鷹の下っ端）昔、暗殺組織「ジョーカー」で鬼帝と一緒にだった。濱田太郎拉致事件で、鬼帝に殺される。

ラーメン屋の大将【本名：さかもと めん坂本麵】（主人公の先輩）暗殺組織時代の先輩。今はラーメン屋をしている。

エディ・レート（主人公の友人）暗殺組織時代の同期。やたらと武器を多く保有し、いろいろと鬼帝を戦場でサポートしている。

(工) 「何年一緒に仕事してたと思ってるんだい。」

(鬼) 「じゃあ頼むわ。」

(工) 「ちゃんと報酬払ってもらうからね。今回は、このラーメン一杯おごつて。」

(鬼) 「しょうがない。」

(佐) 「井練が居ない。」

(坂) 「さつき、風に当たりたいって、外に出たよ。」

(佐) 「美人井練に惚れられている鬼帝くん、行ってあげなよ。じやましないからさ。」

(鬼) 「そうなのか？」

(佐) 「あんたって鈍いわねえ。」

(鬼) 「じゃあ少し失礼する。」

「バタン・・・」

(坂) 「エディ、変わったと思わないかい？鬼帝。」

(工) 「ホント、お人好しになったというか、何というか。」

(鬼) 「春だが、こちら辺は冷え込みが激しい。寒くないか？」

(井) 「大丈夫。私の両親ね、赤鷹のテロに巻き込まれて死んだの。その時、テロを仕切っていたのが、さつき死んだ、ダブルなの。仇撃ってくれてありがとう。」

(鬼) 「礼には及ばないよ。逆にすまない。そんなこととは知らず、無理矢理付いてこさせて。これからは、付いてこなくて良いから。」
その時、井練が俺の胸に抱きついた。

(井) 「そんなこと言わないで。これからも一緒にいて。そして、守って！・・・！」

(鬼) 「分かった・・・」

(井) 「少し寒いから、こっしっていて良い？」

(鬼) 「ああ・・・」

#005：人間の暴走の引き金は0.1秒でも引ける（後書き）

いや、今回エディが怒る所だけの予定でしたが、良い所まで進んじやいましたね。

ここでお知らせ、なんと私の執筆作品の公式ホームページが出来ました。公式ホームページは、<http://www.freepe.com/cgi?akatokki>まで。

さて次回は、とうとう井練に鬼帝が告白されます。鬼帝の決断は
いかに？次回、#006：「昔つから告白は建物の裏と決まっ
てる」お楽しみに。

#006：昔っから告白は建物の裏と決まっている（前書き）

鬼帝戌流【ロイヤル・トゥリナツアチ】（主人公）軍人のようなきちんとした態度、そして何事にも冷静でいられる。銃の使い方は、軍の人たち以上。

佐藤彩（副主人公）普通の平凡な中学生生活に少し暇をもてあそんでいた。

井練由井（副主人公）健気な心を持つ。少し鬼帝に片思い気味。

コール（主人公のお目付役）60を過ぎたおじいちゃん。だが、車の運転、ミサイルなどの発射などは、プロ。

ダブル（赤鷹の下っ端）昔、暗殺組織「ジョーカー」で鬼帝と一緒にだった。濱田太郎拉致事件で、鬼帝に殺される。

ブラック・デビル（ジョーカーの大将）鬼帝は何も話していないため今は謎。

ラーメン屋の大将【本名：さかもと坂本めん麵】（主人公の先輩）暗殺組織時代の先輩。今はラーメン屋をしている。

エディ・レート（主人公の友人）暗殺組織時代の同期。やたらと武器を多く保有し、いろいろと鬼帝を戦場でサポートしている。

(鬼) 「照れくさいな・・・由井・・・」

(井) 「私も戊流って呼ばせてね。」

近くの木陰

(工) 「あのやろう、イケ女ゲットしてんじゃないの。」

(佐) 「結局、じゃましないって言つてのぞいちゃいましたね・・・」

(工) 「今までにないチャンスだからな。」

(佐) 「鬼帝って、今までに付き合つたことないんですか。」

(工) 「ああ。あいつは、4才で両親を亡くし、5才で銃を握つた。それから、来る日も来る日も敵を切り、撃ち、血の雨の中に身を置いて暮らしていた。そんなやつ能力を見て、ジョーカーの大将、ブラック・デビルが特例で彼をジョーカーに入隊させた。そりゃもちろん、上層部の一日中いすに座っているやからには反発されたらしいがな。自分の欲望のためではなく、ただ組織のためにだけに働く銃となつた。そして、入隊2年で軍曹になり、あいつが8才になつた頃には、部隊の大佐にまで上り詰め、異例の早さで部隊の中で暗殺遂行率99.9%を誇る、KILLERSキラーズの入隊を果たした。」

(佐) 「・・・・・・・・・・」

(工) 「まあ、お前さんもどつかであいつのことが好きなんだろう？」

(佐) 「そんなことないですって。あいつとはただのクラスメイトです。」

(工) 「あいつの近くに行つて寒気を感じたことある？」

(佐) 「あります！」

(工) 「あれなんだと思う？」

(佐) 「殺気？」

(工) 「8割方正解。正確に言つと、守る殺気だ。」

(佐) 「へッ？」

(工) 「暗殺とかしていたやからからは、殺気を消す必要がある。故に殺気をコントロールできる。そして、その殺気の放つ人の強さも殺気で分かる。あいつはこの学校は守るべき人がたくさんいると

思っただらう。」

(佐) 「じゃあ、あれって」

(工) 「あいつなりの守り方だよ。まあ、武器をちらつかせることが出来ないこの国じゃあ無意味だけどね。おい、中入っていくぞ。中入っていないと怪しまれるからな。」

(佐) 「入りましょ。」

(鬼) 「今日、これで本編終わり？」

(佐) 「だってさ。」

(鬼) 「時間が余ったのでなんかする？」

(井) 「お詫び言わなきゃ！！」

(鬼) 「そうだったな。作者が受験勉強だなんだで全然更新されていなかったからな。」

(作) 「いいじゃんか！！！」

(佐) 「久々の登場だね〜！！」

(作) 「今回ばかりは出ないといけないかなって思って。」

(鬼) 「ホントに勉強してたんですか？」

(作) 「したさー！！」

(佐) 「いいから、早くお詫び言っちゃって。このあとクラスメイとカラオケなんだけど。」

(作) 「また、私情を持ち出して・・・まあいいや、皆様前回更新より結構時間はたちましたが、まだ読んでくださる皆さん、ホントに感謝しています。また、更新がなく不快に思われた皆さん、お詫び申し上げます。これからも末永く天照暁をよろしく願っています。ガン・トライアルもよろしくね。」

(鬼) 「最後のいらないな。またこっちで宣伝して。」

(佐) 「ホント、私たちなんてどうでもいいって思っているでしょ。」

」

(作) 「ピンッポーン」

(佐) 「殺ッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

(作) 「ね、落ち着こうよ。冗談だからさあ……」

(佐) 「しるか……………」

(作) 「ギャ……………」

(鬼) 「さて頃合いも良いのでこれにて終了と。」

(井) 「待って!!!!!!!!!!」

(鬼) 「何です?」

(井) 「この小説ってアニメ化、コミック化しやすいよね。」

(鬼) 「そうだな。この、台本型小説にしているからな。これだけ

は、あの作者を見習うわ。」

(井) 「じゃあ、私たちの事をマンガやアニメにしてくれる人募集
しちゃうおう!!」

(鬼) 「やめた方が……」

(井) 「やりたい人はホームページまで。」

(佐) 「あー終わった。」

(鬼) 「作者は?」

(佐) 「向こうでのびてる。」

(鬼) 「あの人はほつといてもいいでしょ。今度こそ、次回までさ
いなら……!!!!!!!!!!」

#006：昔っから告白は建物の裏と決まっている（後書き）

今回も最後まで読んでいただきありがとうございます。さて、今回は新キャラ登場です。礼儀正しすぎて鬼帝にいろんな意味で似ています。#007：一人でやるよりみんなでやると楽しいが巻き込んでいい内容とだめな内容がある。お楽しみに。

#007：一人でやるよりみんなでやると楽しいが巻き込んでいい内容とだめな

鬼帝戊流【ロイヤル・トゥリナツツアチ】「早撃ちの13番」(主人公) (キラーズ??) 軍人のようなきちんとした態度、そして何事にも冷静でいられる。銃の使い方は、軍の人たち以上。

佐藤彩(副主人公) 普通の平凡な中学生生活に少し暇をもてあそんでいた。

井練由井(副主人公) 健気な心を持つ。少し鬼帝に片思い気味。

登暁星【どん・ぎょうせい】「鋼鉄の8番」(キラーズ?)

武田弘(生徒会会長) よく滑る会長。よく越智をおちよくる。鬼帝と佐藤には、逆らえない様子。しかし、面倒見は良い。

濱田太郎(生徒会副会長) 滑りの王様。滑りに滑りまくって、佐藤に一回きれられて、背骨めがけて跳び蹴りを食らったことがある。ダブルに襲われたときは、ただ殴られるだけだった。

越智太郎(生徒会役員) 時間にルーズな男。

久保田林(生徒会副会長) まじめな子

岡田千治(生徒会役員) まじめな子

富士剛田(担任・生徒会の先生) 自分の非をしっかりと認める先生。放送の最後「終わり」と言ってしまう。

鬼帝錬鉄(校長)

コール(主人公のお目付役) 60を過ぎたおじいちゃん。だが、車の運転、ミサイルなどの発射などは、プロ。

ダブル(赤鷹の下っ端) 昔、暗殺組織「ジョーカー」で鬼帝と一緒にだった。濱田太郎拉致事件で、鬼帝に殺される。

ブラック・デビル(ジョーカーの大将) 鬼帝は何も話していないため今は謎。

ラーメン屋の大将【本名：さかもと坂本麵】(主人公の先輩) 暗殺組織時代の先輩。今はラーメン屋をしている。

エディ・レート(主人公の友人) 暗殺組織時代の同期。やたらと武

器を多く保有し、いろいろと鬼帝を戦場でサポートしている。

#007：一人でやるよりみんなで作ると楽しいが巻き込んでいい内容とだめな

2007年5月7日（ナレ：鬼）

引き受けたとは言ったものの、デートとは何をするべきなのか？知らぬまま、遊園地に来ている。

（井）「戊流、早く〜！！」

（鬼）「わかった、わかった！！少し落ち着け。実際のところデートとは何をするのだ？」

（井）「男女が、手をつなぎ合って、一緒に楽しいことをすること！！」

（鬼）「なんか、アバウトすぎるような・・・」

（井）「まあまあ、まずは腕を出して。」

（鬼）「こうか？」
すると、井練が飛びついた

（井）「これで私たちも立派なカップル！！」

町中で見るこれはホントに歩きにくそうに見えるのだが・・・

数分後

案外軽々と歩いている自分がいた。しかしながら先程から井練の顔がしんどそうだ。よく見たら、必死で歩幅を合わそうとしている。

こんな時、世の男子はどうするのか？ここは合わせた方がよいのか・・・やってみるか。

井練の顔がだんだん戻っていく。そしてこちらを向き、にこっと笑った。

これで良かったのだろうか？笑ったということは良かったのだろう。

この後、井練の言う「おきまりのデートコース」という順番で遊園

地のアトラクションを回った。

そして、園内にあるとある喫茶店に入った。

(井)「今日は楽しかったー!!鬼帝はどうだった?」

(鬼)「まあ、楽しかったよ。」

(井)「次はどこにしようかなー」

その時、一人の男が銃を持ってウエイターを人質に取った。

(犯)「オイ!!その笠をかぶったやつ!!レジの中の物を全部その鞆に入れる!!」

そういい、一人の僧侶らしき人物を指名した。

(鬼)「少しばかり、やってくる」

(井)「人目が多すぎるから絶対銃はダメ!!警察が来たときややくしくなる」

(鬼)「確かに、では体術でやってくる。ここでおとなしくしてる。」

そうやってしずかに犯人に近づいていった。

(犯)「なんだ貴様!!こいつがどうなっても良いのか?」

(鬼)「人質の交代だ!!」

(犯)「いつ、良いだろう」

そう言い、犯人の人質の代わりになった。

(犯)「さっさと入れろ」

その時だった、犯人の注意がそれ、力が弱まった。それを見計らい、犯人を背負い投げした。それと同時に僧侶らしき人物も受け身を取ろうとした犯人に回し蹴りをした。それはあごを的確に捉えた。

(鬼)「あなた、何処かで会ってませんか?」

(僧)「.....」

何も言わずに僧侶は帰っていった。そして、自分らも危ないので早く園内から出た。

帰り道

女の髪の毛はどうしてこんなに良いにおいなのだろう。柄にもないような事を考えてしまう。

(井)「明日、学校かー」

(鬼)「きょうはすまなかつたなあ。いろいろ解らなくて。」

(井)「いいよ、いいよ。じゃあ最後にお別れのキス!!」

キスまでも井練にリードしてもらった。何とも情けない。

その後二人は各自家へ帰宅した。

2007年5月8日

「キーンコーンコーンコーン!!」

(富)「はよ席付けー!!」

さつきから教室の外に何かいる気配がする。それは機能の僧侶と全く同じ。

(富)「今日は、転校生がいるからな!!」

(転)「皆さん初めまして。そして、約一名には久久!!」

入ってきた男には見覚えがあつた!!

(鬼)「暁星・トシ・ギョウセイ登暁星か?」

(登)「ああ、戌流!ホントに久しいなあ。」

(富)「感動の再会的なのは良いが席に座ってくれないか?」

その時耳元で

(登)「昨日の事情は後で話す」

やはり、こいつだったみたいだ。

昼休み(ナレ:鬼)

(鬼)「CIA!?!」

(登)「声がでかい!」

(鬼)「ステエイツに籍を置く柄じゃあないのになあ」

(登)「なりふり構ってられなくて。仏教だけどたまには救世主も信じてあげないと」

(鬼)「まあ、たいへんそうやなあ」

そこへ佐藤と井練が来た。

(鬼) 「おお、良いところに来た。ウチのクラスの佐藤と井練だ」

(佐) 「初めました。佐藤彩です。」

(井) 「初めまして。鬼帝の彼女の井練由井です。」

(登) 「あのとき一緒にいた子だろ？」

(鬼) 「そうそう」

(登) 「そういや、挨拶。私の名前は登暁星。呼び名は適当に。登トシでも暁星でも・・・」

(井) 「昔、会ったことがあるの？すごくなか良いし」

(鬼) 「例の組織の時、中国マフィアの陳帝と共同体制をとっていてね、そんな時の首領」

(佐) 「お金持ち!？」

(登) 「そうでもないよ。経済不況で収入は少なくて、体勢を立て直すために共同体制をとったんだ」

(鬼) 「そういや、今日の放課後、みんな空いてる？」

(佐) 「私、部活」

(鬼) 「いやー、なんというか、それ関連でみんなに言うっておかなきゃいけないよ」

放課後(ナレ:鬼)

校長室

(鬼) 「佐藤、なんでかちかちになってるの？」

(佐) 「いやー、昔、窓ガラス割って依頼だもん、ここ来るの」

(井) 「なかなか来ないねえ」

(登) 「来たみたいだよ」

「ガラガラガラガラ」

(校) 「これはこれは、忙しい中集まってくれて、ありがとうね」

(鬼) 「そう、しけなさんな。じいちゃん!」

(佐) (井) 「エーーーーーッ」

(鬼) 「あれ、名字で気づかなかった？鬼帝きてい錬鉄れんてつ」

(佐) 「確かに、同じだなーとは思ってたけど」

(校) 「今回呼んだのはね、わしの孫のことに付き合ってくれてい
ることのお礼と今後についてだ。」

(登) 「さて、本題に入りましょう」

(校) 「皆さんは今後このように深く関わって行きますが、
それへの覚悟を示していただきたい。」

(佐) 「一回関わったんだから、最後までやるのが私の道」

(登) 「私は仕事ですが」

(井) 「私は戊流の背中を守るようになるため」

はつきりと言って、佐藤や井練がここまで覚悟があるとは思わな
かった。

(校) 「皆さん覚悟はお有りですな。では、あなた達が行動しやす
いように、手配します。」

一方そのころ

飛行機内

(?) 「暁星はしっかりしてるかなあ。」

#007：一人でやるよりみんなでやると楽しいが巻き込んでいい内容とだめな

長らくお待ちたせいたしましたして、本当にすみません。そのかわりに、今回はいつもより多くなっております。本当にすみません。さて、この長く空いた期間、何もしていなかったわけではありません。来春よりスタートする新ストーリー。なんと、題名が決まりました。題名は「戦神」^{いくさのみ}！！そして、次々に登場人物の名前が決まって行っています。「また、血なまぐさいやつかよう！！」とお思いの方は押さえていただけたら幸いです。また、近々情報を更新します。さて、今回は今回の最後でしゃべった人が出てきます。・・・あたりまえかなあ。とりあえずそう言うことで。次回「#008：どんなこともバランスが大事」お楽しみに。

#008：どんなこともバランスが大事（前書き）

登場人物

鬼帝 戊流【ロイヤル・トゥリナツツアチ】「早撃ちの13番」（主人公）（キラーズ？）軍人のようなきちんとした態度、そして何事にも冷静でいられる。銃の使い方は、軍の人たち以上。

佐藤 彩（副主人公）普通の平凡な中学生生活に少し暇をもてあそんでいた。

井練 由井（副主人公）健気な心を持つ。少し鬼帝に片思い気味。

登 暁星【ドン・ギョウセイ】「鋼鉄の8番」（キラーズ？）陳帝の現在の首領。その昔鬼帝とキラーズで働いていた。現在CIAに席をおく。

藍香【ラン・シャン】

武田 弘（生徒会会長）よく滑る会長。よく越智をおちよくる。鬼帝と佐藤には、逆らえない様子。しかし、面倒見は良い。

濱田 太郎（生徒会副会長）滑りの王様。滑りに滑りまくって、佐藤に一回きれられて、背骨めがけて跳び蹴りを食らったことがある。ダブルに襲われたときは、ただ殴られるだけだった。

越智 太郎（生徒会役員）時間にルーズな男。

久保 田林（生徒会副会長）まじめな子

岡田 千治（生徒会役員）まじめな子

富士 剛田（担任・生徒会の先生）自分の非をしっかりと認める先生。放送の最後「終わり」と言ってしまう。

鬼帝 錬鉄（校長）

コール（主人公のお目付役）60を過ぎたおじいちゃん。だが、車の運転、ミサイルなどの発射などは、プロ。

ダブル（赤鷹の下っ端）昔、暗殺組織「ジョーカー」で鬼帝と一緒にだった。濱田太郎拉致事件で、鬼帝に殺される。

ブラック・デビル（ジョーカーの大将）鬼帝は何も話していないた

め今は謎。

ラーメン屋の大将【本名：さかもと坂本めん麵】（主人公の先輩）暗殺組織時代の先輩。今はラーメン屋をしている。

エディ・レート（主人公の友人）暗殺組織時代の同期。やたらと武器を多く保有し、いろいろと鬼帝を戦場でサポートしている。

#008：どんなこともバランスが大事

2007年5月9日（ナレ：井）

西日本国際空港

（？）「あー、こんなのだったらもつと詳しい地図、持ってくるんだったなあ・・・」

一方そのころ

2年8組

（佐）「はあああああああ！？今日も転入生ってどついう事ですかあ？」

（富）「どつって言われてもそのまんまだ。」

（井）「にぎやかで良いじゃないですか。戌流もそう思うでしょ。」

（鬼）「そうだな。それでいつたい誰なんだ？」

（登）「確かに気になる。」

（富）「えーっつと・・・」

そう言い、先生は出席簿を取り出した。

（富）「あい・かおる？」

その時だった、登と戌流の顔が一気に悪くなった。

（登）「戌流、気のせい・・・だよ。ラン・シャンじゃないよね。」

（鬼）「そうそう、きつと何かの間違いだよ。先生も読み間違えていたようだし。見てみようよ。」

そう言い二人は出席簿をのぞき込んだ

そこには、

「藍・香」

とあった。

（鬼）「やばいな」

（登）「ああ、やばい」

その時二人がお互いを見合っつうなずいた。

(鬼) (登) 「先生、腹が痛いんでトイレ行ってきまーす！」
それを言うと走って教室の出入り口まで言って、ドアから飛び出そ
うとした。

すると、ドアの前には校長先生がいた。

(校) 「いやー元気だねえ」

(鬼) 「じいちゃん!」

(登) 「まさか・・・」

(?) 「お久しぶりです。鬼帝さん。そして、元気にしてた? ドン
ちゃん。」

(鬼) (登) 「シャツ・・・シャン!」

その人は身長は170ぐらいあると思う。きれいな黒色の長い髪の毛。胸も・・・私よりあるなあ・・・それぐらい、ものすごい美人だった。

(佐) 「初めまして。」

(井) 「初めまして。」

(藍) 「初めまして。私は、リン・シャン藍香と言います。」

休み時間

(井) 「藍さん、すごいきれいだったね。私もあんなにキレイになりたいなあ。」

(佐) 「そうそう、ホントだよ。何で鬼帝も登も怯えてるの?」

(鬼) 「お前らは良いなあ。何も知らなくて。」

(登) 「ホント、良いよね。」

(藍) 「あら、皆さんお集まりで。」

(佐) 「藍さん。そう言えば、この二人とはどういう関係で?」

(藍) 「鬼帝とはドンちゃんの友達と言うことで。」

(佐) 「なるほど、と言うことで登、今日からドンちゃんで行こう。」

(登) 「どさくさに紛れて決めるなああ!」

(井) 「登さんとは?」

すると、藍さんは頬を赤らめた。

(藍) 「そのう・・・あのう・・・婚約者です。」

(井) 「婚?」

(佐) 「約?」

(登) 「者???ちょっとまで、婚約予定者だろうが!!」

(藍) 「私の心は、もうあなたのとりこです。」

(鬼) 「良かったなあ、暁星。」

(登) 「戌流!!見捨てるなあ!!」

(佐) 「なあに、照れちゃって。そっぴや、そろそろ次の授業が始まる。」

(井) 「体育だから、早く着替えに行こう。」

(鬼) 「体育・・・授業内容は?」

(佐) 「男女ともサッカーだけ。」

(藍) 「あら、私、サッカー好きですよ。」

(鬼) (登) 「・・・」

(鬼) 「今日、早退したいなあ。暁星。」

(登) 「まっただ。」

#008：どんなこともバランスが大事（後書き）

毎度、読んでいただきありがとうございます。今回も新キャラ登場でした。藍さんキレイです。美しいです。中学生とは思えません。しかし、実は何かあるんですね。鬼帝や登は知っているようですが。さて、今回は戦神いくはがみについての情報はありません。すみません。また、進行があればお伝えします。さて、今回は今回藍さんを鬼帝や登が恐れる理由が分かります。はたしていったい？

次回、「#009：カセットテープにはA面とB面がある」お楽しみに。

#009：カセットテープにはA面とB面がある（前書き）

登場人物

鬼帝 戊流【ロイヤル・トゥリナツツアチ】「早撃ちの13番」（主人公）（キラーズ？）軍人のようなきちんとした態度、そして何事にも冷静でいられる。銃の使い方は、軍の人たち以上。

佐藤 彩（副主人公）普通の平凡な中学生生活に少し暇をもてあそんでいた。

井練 由井（副主人公）健気な心を持つ。少し鬼帝に片思い気味。

登 暁星【ドン・ギョウセイ】「鋼鉄の8番」（キラーズ？）陳帝の現在の首領。その昔鬼帝とキラーズで働いていた。現在CIAに席をおく。

藍 香【ラン・シャン】登の婚約者。相当好きらしい。

武田 弘（生徒会会長）よく滑る会長。よく越智をおちよくる。鬼帝と佐藤には、逆らえない様子。しかし、面倒見は良い。

濱田 太郎（生徒会副会長）滑りの王様。滑りに滑りまくって、佐藤に一回きれられて、背骨めがけて跳び蹴りを食らったことがある。ダブルに襲われたときは、ただ殴られるだけだった。

越智 太郎（生徒会役員）時間にルーズな男。

久保 田林（生徒会副会長）まじめな子

岡田 千治（生徒会役員）まじめな子

富士 剛田（担任・生徒会の先生）自分の非をしっかりと認める先生。放送の最後「終わり」と言ってしまう。

鬼帝 錬鉄（校長）

コール（主人公のお目付役）60を過ぎたおじいちゃん。だが、車の運転、ミサイルなどの発射などは、プロ。

ダブル（赤鷹の下っ端）昔、暗殺組織「ジョーカー」で鬼帝と一緒にだった。濱田太郎拉致事件で、鬼帝に殺される。

ブラック・デビル（ジョーカーの大将）鬼帝は何も話していないた

め今は謎。

ラーメン屋の大将【本名：さかもと坂本めん麵】（主人公の先輩）暗殺組織時代の先輩。今はラーメン屋をしている。

エディ・レート（主人公の友人）暗殺組織時代の同期。やたらと武器を多く保有し、いろいろと鬼帝を戦場でサポートしている。

#009：カセットテープにはA面とB面がある

(佐)「今回は、本編に入る前に井練からドンちゃんに質問があるんだって。」

(登)「ん？(と言うより、なんかドンちゃん定着してない??)」

(井)「前書きの所に書いてある、(鋼鉄の8番)って?」

(佐)「確かに、鬼帝も付いてるよね。まあ、(早撃ちの)は、解るけど。鋼鉄って?」

(登)「まあ、後ほど解ると言うことで。」

(佐)(井)「エーーーー!!」

(鬼)「それの方が楽しいだろうし。ほんじゃあ、本編行ってみよう。」

5時間目(ナレ：登)

絶対やばい、絶対やばい。冗談じゃない。シャンにサッカーなんて……

鬼に金棒だぁ……

「キーンコーンカーンコーン」

リフティングをしながら、戊流と話した。

(登)「男女別々だよねえ……」

(鬼)「当たり前だよ。コートを交互に使っていくんだけど……」

┌

(登)「逃げ場がないな……」

そうこう言っていると、女子の試合が始まった。

Aチームには井練が中盤にいて、トップに佐藤がいた。

Bチームにはシャンがキーパーでいた。

(佐)「由井ちゃんこっち!!」

(井)「ハイ!!」

佐藤がディフェンスをかわしていく。

(鬼) 「あれ、入ると思うか？」

(登) 「奇跡だろう・・・入れば・・・」
すると、シュートの体制に入った。

(佐) 「といやー！ー！！」

(井) 「カーブのかかった、ピンポイントシュートだあ！！」

ボールは左にそれ、ゴールの左上の隅にめがけて曲がっていった。

(鬼) 「あいつも、手加減は知ってるから、変な方向には、飛ばさないよねえ・・・」

(登) 「当たり前だ。・・・でも、過去の記憶が・・・」
その瞬間、シャンが動き出した。

「シュツツツ・・・」

(佐) 「さっきまで真ん中にいたのに・・・いつの間にあんな、ゴールの端まで」

「バシツツツツ！！！！」

(井) 「と・・・止めた！！いままで、誰も止めたことがないあのボールを・・・」

右手で止めていた。

(鬼) 「この小説はサッカー路線をこの後行くのか？」

(登) 「そんなことより、こつからだなあ・・・」

すると、ボールを左手に持ち替え、左の少し前の方へ軽く投げた。

(登) 「や・・・やばい！！！！」

(鬼) 「由井！！佐藤！！今からボールが止まるまで、そのボールに触るなー！！」

(井) (佐) 「エツツツ！??」

そうこうしているうちに始まった。

「バキューーン」

左前に落としたボールがバウンドする前に左足を軸にして右足のかかとでボールを高くそして前へ飛ばした。

(鬼) 「おいおい、昔より威力あがってねえか？」

(登) 「そりゃそうだ、毎日かかとだけで一時間ほどランニングに

行つてたからなあ・・・」

そして、高くボールがあがっている内にシャンは走り出した。

「ビューーーーーーン」

(佐)「はっ速ツーーーーー!!!」

ディフェンスを華麗にかわして行く。

(井)「もう、ゴール前だーーーーー!!!」

ボールの落下地点に追いついていた。すると、飛び上がり空中で回し蹴りのように左足を軸に右かかとでボールをゴールネットめがけてたたきつけた。

「ドカーーーーーン」

ボールはネットのぼろくなっていたところから突き抜けていた。

(鬼)「やっちゃったな」

放課後

(佐)「藍さんすごいですねえ」

(藍)「いえいえ、それほどでもないですよ。あなたのシュートも重かったですよ。」

(井)「それにしても、そんなに細い足なのにホント、足が速くていいなあ。」

(登)「理論簡単に説明してあげれば。」

(藍)「ドンちゃん見てくれた?」

(登)「ああ、けが人が出ないか戊流と見てたよ。」

(鬼)「そうそう、相手のキーパーの子、意識失って今、保健室なんだから。」

(藍)「反省します。」

(佐)「それで、どうやったら速くなるの?」

(藍)「筋肉量と筋繊維の強度の比率なんですがある比率になると異常な早さが出るんです。後は、走り方とかをトレーニングしたらもっと早くなります。」

(井)「なるほど!それで、どんな比率で、どんなメニューをすれ

ばいいの?」

(藍) 「それは企業秘密と言うことで。」

(佐) 「でも、それだったらキック力はどう説明するんですか?いくら早くても力のある足でもごつい筋肉がないとあそこまでならんんじゃないの?」

(鬼) 「こいつは気道五段だ。体の中の力を集めて体全身の筋肉を使い、一点集中で力をかけられるんだ。」

(井) 「へー」

(藍) 「夕食の支度をしなくてはなりません。では、ドンちゃん帰りましょ。」

(登) 「お前もつ、家決まったのか?」

(藍) 「決まってるも何も、ドンちゃんの家ですけど。まあ、妻として同居はしなくては。」

(佐) 「ど!!!」

(井) 「う!!!」

(鬼) 「きよ!!!!!!!????」

(藍) 「鬼帝さんは知っていたでしょ。向こうでも同居してたって。」

(登) 「戌流、今日は泊めて?」

(藍) 「そう言えば、鬼帝さんお一人ですよねえ。私が料理を作ります。」

(鬼) 「藍やめてくれ!!」

(井) 「戌流、別に私以外の女の人の料理を食べても怒らないよ。」

(鬼) 「そうじゃなくて・・・」

(佐) 「そうだ、今日は鬼帝の家でお泊まりだー!!」

(登) 「コールを呼んどいて。」

(鬼) 「そうだな・・・」

#009：カセットテープにはA面とB面がある（後書き）

今回も長々と書いちゃったなあ。そして、藍さん怖いですねえ。あのキツク力。鬼帝も恐れるわけですな。さて、今回所々で出てきた理論はあくまでも適当な空想なので信じないでください。さて、今回は鬼帝や登が今回に引き続き藍を恐れている理由が分かります。次回、「#010：寝る前にはトイレに行つときなさい」お楽しみに。

#010：寝る前にはトイレに行つときなさい（前書き）

鬼帝戊流【ロイヤル・トゥリナツツアチ】「早撃ちの13番」（主人公）（キラーズ？）軍人のようなきちんとした態度、そして何事にも冷静でいられる。銃の使い方は、軍の人たち以上。

佐藤彩（副主人公）普通の平凡な中学生生活に少し暇をもてあそんでいた。

井練由井（副主人公）健気な心を持つ。少し鬼帝に片思い気味。

登暁星【ドン・ギョウセイ】「鋼鉄の8番」（キラーズ？）陳帝の現在の首領。その昔鬼帝とキラーズで働いていた。現在CIAに席をおく。

藍香【ラン・シャン】登の婚約者。相当好きらしい。

武田弘（生徒会会長）よく滑る会長。よく越智をおちよくる。鬼帝と佐藤には、逆らえない様子。しかし、面倒見は良い。

濱田太郎（生徒会副会長）滑りの王様。滑りに滑りまくって、佐藤に一回きられて、背骨めがけて跳び蹴りを食らったことがある。ダブルに襲われたときは、ただ殴られるだけだった。

越智太郎（生徒会役員）時間にルーズな男。

久保田林（生徒会副会長）まじめな子

岡田千治（生徒会役員）まじめな子

富士剛田（担任・生徒会の先生）自分の非をしっかりと認める先生。放送の最後「終わり」と言ってしまう。

鬼帝錬鉄（校長）

コール（主人公のお目付役）60を過ぎたおじいちゃん。だが、車の運転、ミサイルなどの発射などは、プロ。

ダブル（赤鷹の下っ端）昔、暗殺組織「ジョーカー」で鬼帝と一緒にだった。濱田太郎拉致事件で、鬼帝に殺される。

ブラック・デビル（ジョーカーの大将）鬼帝は何も話していないため今は謎。

ラーメン屋の大将【本名：坂本麵】さかもとめん（主人公の先輩）暗殺組織時代の先輩。今はラーメン屋をしている。

エディ・レイト（主人公の友人）暗殺組織時代の同期。やたらと武器を多く保有し、いろいろと鬼帝を戦場でサポートしている。

#010：寝る前にはトイレに行つときなさい

(佐) 「今回も本編の前にお話が!」

(鬼) 「またか・・・」

(佐) 「あの、職務怠慢の作者のことだね。」

(井) 「それで何?」

(佐) 「いままでさ、いろいろ銃撃シーンやボケのシーンとかさ、まあそれなりにかいているじゃん。確かにさ、この台本形式の小説は新鮮でいいなあと思ったよ。でもさ、何で私たちの外見についての記述がここまで少ないんだああああ!!」

(井) 「確かに・・・」

(鬼) 「それなら心配ないぞ。」

(佐) 「どういう事よ?」

(鬼) 「詳しくは最後で!!では、本編スタート!!」

5月9日

帰り道(ナレ:佐)

帰り道、五人はある人物と出くわした。

(武) 「よう!!鬼帝に佐藤!!横にいるのは校内一美人の井練さんだね。で、後ろの二人は?」

それは、2年3組のアホ生徒会長、武田だった。

(登) 「この間、転校してきました登暁星と申します。以後お見知りおきを。」

そう言い、ドンちゃんは両手を合わせて礼をした。

(武) 「いえいえ、こちらこそ。」

そう言い、武田もドンちゃんのまねをして礼をした。

(藍) 「私もこの間転校してきた藍香と言います。」
どうぞよろしくと言いかけた瞬間、

(武) 「おおおおお!!!むっちゃ、タイプ!!!僕と付き合っ

てください。」

こいつはよくもまあ公衆の面前で大胆にも言えるなあと思った。

(藍)「お気持ちはありがたいのですが、私は・・ドンちゃんの妻なので。」

(武)「あー、残念・・・てつちよいまたんかーい!!」
なぜかのりッコミ。

(武)「お宅ら日本の法律解ってますか？」

(登)「武田さん!こいつは妻じゃなくて婚約予定者!!」

(藍)「もう、照れちゃって!!すでに夫婦みたいな間柄なんだからあ。」

そう言えば、ドンちゃんいつも妻ではないと否定するけど婚約予定者と言うことにはあまり文句を言わない(というより自分から言うてる)と思った。

(佐)「ところで、今日暇だったら鬼帝の家でみんなでお泊まりだけど来る。明日、創立記念日で学校休みだし。」

武田が急に声を裏返らせていった。

(武)「いけませーん!!若い男女が一つ屋根の下でなんて。夜中にチョメチョメなんて!」

(佐)「何でお前の頭はその方向に回路がつながる!!ちゃんと分けるよ!!」

そこに、藍さんと由井が反論する。

(藍)「私はドンちゃんと寝ますよ。」

(井)「私だって、鬼帝と寝たい。」

(佐)「お前らはこの小説を15禁にしたいんかー!!」

(武)「とりあえず、楽しそうだし、参加するよ。」

場展開に疑問を持つと思うが、・・・と言うよりなんかだるい、もうナレーションめんどいなあ。とりあえず、なんやかんやで鬼帝の内に入った。

(佐)「私の家の問い面だからさあ、いつも玄関見てたけどどんだけひろいねん!!」

そこはもう旅館のように広々としたものだった。

(鬼) 「前にすんでいた人がここで民宿をしてたらしく、内装をキレイにしたただだからまだ、人の家的な雰囲気はないけど。まあ、とりあえず奥のリビングに行こう。」

そう言い、みんなは靴を玄関に脱ぎ、リビングに案内された。

(鬼) 「一応、そこに地図貼ってるから見といて。」

(井) 「あつ！寝間着忘れた。」

(佐) 「ホントだ！どうしよう？」

(鬼) 「たぶん心配しなくてもいい。そろそろ来る頃だから。」

(佐) 「？」

その時、玄関から誰から入ってきた。

(コ) 「皆様、お久しぶりです、そして初めまして。」

それはコールであった。しかし、段ボール箱にたくさん何かしら詰めて重たそうに持っている。

(登) 「コールさんお久しぶりです。」

(コ) 「登殿ではないか、藍殿とはうまくいつているのかい？」

(登) 「みんなの前では言わないでくれ。ところでそれは？」

(コ) 「戌流様より頼まれていた浴衣と洗顔具です。」

そして、楽しいお泊まりは始まった。

最初に夕食と言うことでみんなでカレーを作ろうと思っていた。しかし

(登) 「ここは俺の出番だな。中華料理フルコースを作るよ。」

私や武田、由井はただ口だけが開いていた。

(藍) 「手伝います!!」

そして二人はキッチンに向かっていったそれはすでに夫婦も同然だった。

30分後

その間雑談をしていたが出てきた料理を目の前に驚きを隠せずにいた

(佐) 「すごい。中華料理店のやつみたい。」

(登) 「ある程度余ってるから好きなだけどうぞ。」

(井)「この酢豚甘酸っぱくておいしい。藍さん、今度教えてくださいね。」

(藍)「はい。」
そんなこなを言っていた。

そして食後、風呂が沸いたと言うことで先に女子チームが入った。

(佐)「広ーい」

(井)「見も心もリラックスできますね。」

(藍)「ドンちゃんと入りたかったなあ。」

(佐)「藍さん、真顔で危ない言葉言わないで。お願いだから。どこぞから苦情が来るから。」

(井)「ほんとお似合いですね。登さんと。」

(藍)「あら、鬼帝さんと由井さんも結構良いですよ。」

(佐)「なんか私だけはみごかー。」

(藍)「武田さんとかどうですか？」

(佐)「勝手に妄想を走らせる人とは嫌です!!」

(井)「ところで、なんで鬼帝さんや登さんは藍さんと居たくないんだろう。」

(藍)「実は昔っから人に変な夢を見させることが出来るんですけど、昔はコントロールが出来ていなくてひどい物を見たそう。だからだと思います。」

(佐)「私たちは大丈夫よねえ?」

(藍)「ちゃんとコントロールできますから、安心してください。」
そうこう、ふざけ合って話していた。

そうやって一日が過ぎた。だが問題は夜にあった。井練はしようがないからと納得してくれたが、どうしても藍さんがドンちゃんと寝たいらしく断固として聞かない。最終手段として、コールが見張り役をしてくれて、一段落した。

翌日

みんなは目覚めの良い朝を迎えた。案の定、ドンちゃんはクマができていた。恐怖からなんだと思った。そして、みんなよりも早く鬼

帝が起きていたらしく、朝食としてロールパン、サラダそしてオニオンスープを作って並べていた。今回いろんな顔が見られて良かったなあと思った。その賑やかな食卓に向けてテレビのニュースが聞こえてきた。

(テレビ)「昨日夜0時過ぎ、殺人事件が起きました。」

(佐)「いやーしんどかった。」

(井)「ところで、最初の続きなんだけど・・・」

(鬼)「時間がないから無理、とりあえずヒントとして十話突破記念であると言っことかな。」

(井)「と言っことでさよならー!」

#010：寝る前にはトイレに行つときなさい（後書き）

ほんと、ごたごたしていて、すみません。最新情報もないのでなおさらすみません。さて、今回は連載一周年と十話突破企画です。お楽しみに。

(鬼) 「とりあえず、時系列に紹介しようか。」
(佐) 「ほんじゃあ、最初は鬼帝からだね。」

鬼帝戊流 (Boiu Kitei)

6 / 4 生まれ 血液型 O 型 身長 160 センチ

生まれた場所は今のところ、不明

キラーズ

昔の名前はロイヤル・トゥリナツアチ。字は、早撃ちの13番。

幼少期より血の雨の中で生きていた彼は腕を買われて、ジョーカー

に入隊。彼の活躍はすさまじく、異例の早さでジョーカー内の暗殺

部隊、キラーズに特例で席を置くことになる。

家族関係

父、母の生死は今のところ鬼帝本人から口にしていない。

祖父は道前中学校校長

転勤経路

？～ロシア～タイ～日本

好きな食べ物

栄養補助食品・白米

嫌いな食べ物

特になし

(鬼) 「以上、私でした。」

(井) 「最初の登場シーンはよくあるパターンだね。」

(鬼) 「そういうな。」

(佐) 「これ、全部の人の分やるの?」

(井) 「大丈夫だよ。ちよいとしか出てない人は、よくある五行

完結になるから。」

(鬼) 「さて次は、佐藤。」

佐藤彩 (Aya Satou)

4 / 30 生まれ。血液型 A 型 身長 158 センチ
生まれも育ちも道前地区。

家族関係

父と母は海外で仕事中。

大学 3 年生の兄がいる。

運動

運動神経は抜群で特にハンドボールが得意でハンドボール部に所属。

次期キャプテン候補。

好きな食べ物

おでん・パフェ・ケーキ

嫌いな食べ物

きんぴらごぼう

(佐) 「こう見ると、なんだか恥ずかしい・・・。」

(鬼) 「おでん好きだったんだ。」

(佐) 「寒い日に食べたときのおでんが体の心から温まるのが好きで。」

(井) 「わかるわかる!!」

(佐) 「・・・。」

(井) 「どうしたの?」

(佐) 「これまでの話の中で自分の家族について話したこと無いのに・・・。」

(井) 「ほんとだ、詳しく書いてある。」

(鬼) 「今回の企画話は、これまでにかけなかった細かい設定もかねているんだ。」

(井) 「つまり、今まで作者が手を抜いていたところの補助って事?」

(鬼) 「そうそう。だから前回、大丈夫と言ったんだ。」

(佐) 「まあ、雑談は後でゆっくり出来るし、どんどん行ってみよう!」

(井) 「次は、我がクラス担任、富士剛田先生です。」

富士剛田 (G o t a F u j i)

5 / 2 生まれ。血液型 O 型 身長 1 7 4 センチ

道前地区在住

人柄

自分の非をしつかり認める先生。人を思いやったり、いたわったりする事を信念としており、そのためか転入生の受け入れを積極的にしているとの噂がある。

口癖

放送の最後「終わり」と言ってしまう。

家族関係

妻がいる。

好きな食べ物

牛乳・かき玉汁

嫌いな食べ物

紅葉おろし

(鬼) 「そう言えば、先生は3番目に登場したんだなあ。」

(佐) 「そんじゃあ、続いて生徒会メンバーを一挙に紹介。」

(井) 「その次は私だよ。」

武田弘 (H i r o T a k e d a)

8 / 2 2 生まれ。血液型 O 型 身長 1 6 7 センチ

人柄

よく滑る会長。よく越智をおちよくる。鬼帝と佐藤には、逆らえない様子。しかし、面倒見は良い。

思考回路

何かと妄想が激しい一面を見せることがあり、鬼帝の家で宿泊するとき、何かと佐藤ともめた。

家族関係

父は電機メーカーの社員

母は専業主婦

好きな食べ物

スパゲッティ

嫌いな食べ物

みかん

濱田太郎 (Taro Hamada)

1/9生まれ。血液型B型 身長165センチ

人柄

滑りの王様。滑りに滑りまくって、佐藤に一回きれられて、背骨めがけて跳び蹴りを食らったことがある。ダブルに襲われたときは、ただ殴られるだけだった。

家族関係

父は銀行員

母は専業主婦

好きな食べ物

肉じゃが

嫌いな食べ物

とうもろこし

越智太郎 (Taro Ochi)

7/7生まれ。血液型A型 身長169センチ

人柄

時間にルーズな男。武田、濱田とは幼稚園の頃からの中。一時期、悪三（悪ガキ三人）と呼ばれていたことも。

家族関係

父は銀行員

母は医療事務

好きな食べ物
焼きそば
嫌いな食べ物
お好み焼き

久保田林 (Rin Kubota)
12/6生まれ。血液型A型 身長155センチ
人柄

まじめな子。相当、近眼らしく青い縁のめがねをかけている。
家族関係

父はスーパーの店長
母はタクシー運転手
妹は道前小学校5年生

好きな食べ物
アイスクリーム
嫌いな食べ物
苦い物

岡田千治 (Chiharu Okada)
12/9生まれ。血液型B型 身長152センチ
人柄

まじめな子。久保田とは反対で遠視がひどい。赤い縁のめがねをか
けている。

家族関係
父は銀行員
母は看護師
姉は大学3年生
好きな食べ物
ケーキ
嫌いな食べ物

コーヒ

- (鬼) 「こう見るとホントに手を抜いてるな。」
(井) 「私より前にこんなにも人が出てたなんて。」
(佐) 「あのときは初めの方で、時間配分が悪かったし。」
(鬼) 「続いて、誘拐事件編で初登場した人たちです。」
(井) 「やっと私の登場!!」

井練由井 (Yui Iren)

10/9生まれ。血液型AB型 身長158センチ

人柄

健気な心を持つ。誘拐事件編で鬼帝に片思いする。事件後その想いを伝えるとあっさりを受け取ってもらえ、翌日にはデートに行ってる。そのデート編ではデートの最中のトラブルに対して冷静に対処したりしており、誘拐事件編の時よりものおじしなくなった。

家族関係

両親ともに死亡

好きな食べ物

焼きそば

嫌いな食べ物

ホタテ

コール (Coll)

本名：レコール・サムラス (Lecoll Samlas)

9/9生まれ。血液型A型 身長175センチ

人柄

60を過ぎたおじいちゃん。だが、車の運転、ミサイルなどの発射などは、プロ。

いろいろな分野に詳しく、まさに「歩く辞書」。いつから鬼帝と一緒なのかはまだ明らかにされず。

家族関係

不明

好きな食べ物

焼き魚

嫌いな食べ物

ハンバーガー

ダブル(Double)

本名：カーミン・ドルトリ(Carmine Doltrici)

3/13生まれ。血液型B型 身長174センチ

経歴

昔、暗殺組織「ジョーカー」で鬼帝と一緒にだった。しかし、キラーズメンバーではない。濱田太郎拉致事件で、赤鷹に所属していることを明かした。その後、銃撃戦により鬼帝に殺される。

家族関係

不明

好きな食べ物

スペアリブ

嫌いな食べ物

ケーキ

ラーメン屋の大将

本名：坂本麵(Men Sakamoto)

2/18生まれ。血液型O型 身長170センチ

人柄

温かい目のラーメン屋主人。作るラーメンは忘れられない味で天下
一品。暗殺組織時代の先輩。

家族関係

妻がいる

好きな食べ物

中華

嫌いな食べ物

生クリーム

エディ・レート (Eddy Leate)

3/3生まれ。血液型B型 身長165センチ

人柄

暗殺組織時代の同期。やたらと武器を多く保有し、いろいろと鬼帝を戦場でサポートしている。

家族関係

母のみで喫茶店の店長

好きな食べ物

アップルパイ

嫌いな食べ物

ようかん

(鬼) 「誘拐事件編で初登場を飾ったメンバーでした。」

(佐) 「このときに初めて、鬼帝の過去が部分的に明らかになったよね。」

(井) 「このときから鬼帝にベタ惚れです。」

(佐) 「はいはい……。次は、レギュラーメンバー増加編で増えた三人です。」

登壇星【ドン・ギョウセイ】 (Gyousei Done)

5/15生まれ。血液型O型 身長163センチ

陳帝の現在の首領。その昔鬼帝とキラーズで働いていた。鋼鉄の8番でキラーズ?。現在CIAに席をおく。温厚でいつも笑顔を絶やさない。その笑顔の時目が糸目になることから、付いたあだ名が糸目。めつたに怒らないが、糸目から目を見開いた状態になった時あることが起きるらしい。得意料理は中華。

家族関係

不明

好きな食べ物

ご飯

嫌いな食べ物

シナモンロール

藍香【ラン・シャン】(Xian Lan)

2/20生まれ。血液型A型 身長170センチ

人柄

昔、キラーズに所属し、速脚の7番、キラーズ？。スタイル抜群、性格にも文句なしの美人。しかし、キック力があまりにも強かったり、足が相当速かったり……。登の婚約予定者(本人曰く、登の妻)。相当好きらしい。普段はロングスカートもはいているが、大胆なスリットが入っているため走ると太股がちらり・・・

家族関係

不明

好きな食べ物

酢豚

嫌いな食べ物

かずのこ

鬼帝錬鉄(Rentetu Kitei)

11/14生まれ。血液型O型 身長170センチ

人柄

道前中学校長。戊流の祖父らしい。転入生の対応が抜群に良い。

家族関係

妻がいる

好きな食べ物

鯖のみそ煮

嫌いな食べ物
バナナ

- (鬼) 「以上最近増えた三人でした。」
- (佐) 「藍さんのキツクはホントに怖いねえ。」
- (鬼) 「ホントに怖いねえ……。」
- (井) 「ところであの二人、すごく仲良しだね、あの二人。」
- (鬼) 「確かに。」
- (佐) 「世間で言うバカップル？」
- (鬼) 「暁星の調子があがればそうなるだろうけど。」
- (井) 「いつもにこやかな笑顔だもんね。」
- (佐) 「さて、次は特別ゲストですが……誰？」
- (鬼) 「あれ聞いてないの？……まあいいや。久方ぶりの登場！」
- (井) 「作者です!!」
- (作) 「いやー、どうもどうも」
- (佐) 「殺ッ!!!」
- (鬼) 「今回は平和に行きたいのだが……」
- (井) 「年明け早々、流血話じゃなくても良いでしょ？」
- (佐) 「しょうがないなあ。」
- (作) 「マジで怖い……」
- (鬼) 「とりあえず、質問等々をぶつけていきます。」
- (井) 「まず始めに、ペンネーム『作者！いい加減に話進ませろ』さんから。ほぼ月一更新ですが、どうして遅いのですか？」
- (佐) 「確かに、遅い。」
- (作) 「あんまり偉そうなこと言えないんだけど、実のところは少しあることについて調べていて、それについての報告書を作ったり、本を読み漁ったりとか、してたからなんだ。」
- (鬼) 「多忙だな。いつも何時に寝ている？」
- (作) 「ほとんど、次の日になってから。今年に入ってから、夢を見る暇がないぐらいだからねえ。」

(井) 「では、次！ペンネーム『手抜き作者撲滅キャンペーン』さんから。」

(作) 「ほんと、僕嫌われてる？完全に尊敬の意が見受けられないんだけど。」

(井) 「戯れ言はスルーして。時会話の構成はいつ思いつきますか？」

(作) 「いろんな時に思いつく。普通に夕飯作ったりしているときとか、掃除しているときにも思いつく。まあ、スタイルがこうだから月一更新になるんだけどね。」

(鬼) 「ちなみに、次の話の内容は決まってる？」

(作) 「とりあえず決まってる。初めの方は書いているし、また書き上がったら掲載するよ。」

(佐) 「もう、怠けないでくださいよ。」

(井) 「さて、次に行きたいと……」
カンペ

(鬼) 「やはり時間の問題かぁ。時間がないたため今回はこの辺で作者対談はお開きにします。」

(作) 「ありがとうございます。また、呼んでね。」

(鬼) 「さて、長々と話してきましたがもう時間と言つことのでお開きとさせていただきますが……」

(佐) 「最近の更新遅れを反省して作者から、VTRが……！」

(井) 「見てみよ……！」

「こつんこつんこつんこつん……」
連続殺人事件。

迫り寄る魔の手。

仲間を取り戻すことが出来るのか。

次回、スタート……！！

(鬼) 「次もシリーズ物かぁ」

(井) 「まあそう言わずに。」

(佐) 「とりあえず、ここらでお開きです。」

(鬼) (佐) (井) 「本当にありがとうございます。」

#OOA：連載開始一周年記念&十話突破記念！双銃の全部見せますスペシャル

だいぶ遅くなりました。しかし、私はまだがんばって書いてます。
今後の話の展開にご注目下さい。

#011：多数決ほど人が流されやすい物はない（前書き）

毎度毎度、更新遅れてすみません。月刊雑誌並みです。

#011：多数決ほど人が流されやすい物はない

5月9日

住宅街（ナレ：作）

「コツコツコツコツ……」

黒いコートを着た人が女を追いつめていく。

（女）「ハア・ハア・ハア……」

（？）「行き止まりだ……」

（女）「キヤアツ……」

5月12日

放課後（ナレ：鬼）

（佐）「この間の通り魔事件、全然手がかりが見つからないんだって。」

（井）「襲われたらどうしよう。戊流……！」

若干涙目ですり寄ってくる。

（鬼）「心配ない。セキュリティは完璧だ。」

すると、顔をふくらませて井練は言った。

（井）「そこは、俺が付いてるよとか言っただけほしいなあ。」

（鬼）「……性に合わん」

口ではそうと言ったものの、ホントに泣き出しそうであるから、頭もなでてみた。井練は泣きやんだ。すると、回りから殺気がたくさん感じられる。一瞬、銃を抜きそうになったがよく考えれば片手でもどうにかなると思い、抜かないでいられた。

（登）「何かよう？話があるって？」

首にシャンを巻いて（正確には巻き付かれて）登は来た。

（鬼）「今後の活動だが、俺の家を本部とする。異論は……」
間が空いてから、口火を切ったのは佐藤だった。

（佐）「ちよっと待って。つまりあの活動を続けるために本部って、

まさか泊まり込みもあるの？」

(鬼) 「そう言うことになる。」

(佐) 「あんた、この間藍さんを無理矢理寝かすのにどれだけ苦労したと思ってるの？」

(鬼) 「問題ない。」

(佐) 「何が問題ないだ!!」

(藍) 「問題ないよ。」

(登) 「俺たちはそんなときには睡眠をとらない。正確にはとれないといった方が良いかな。」

(鬼) 「と言うことだ。とりあえず、問題がなさそうだから、このまま本部へ直行とする。」

そう言い、みんなを引き連れて自宅兼本部に集まった。

呼んでおいたコールはすでに付いており、掃除を終わらせていた。

(コ) 「戊流様、中の方は万全です。」

(鬼) 「いつもすまない。」

(登) 「とりあえず、今日は中を見るだけって事？」

(鬼) 「いや、実は仕事が入り込んでいる。」

奥の会議室に行き、みんないすに座らせた。

(コ) 「私たちはこれから、赤鷹の残党狩りをします。今後目撃情報等を集めます。」

(井) 「でも、顔が解らなきゃあ、何も出来ないよ。」

(鬼) 「確かにそうなのだが、とりあえず一人ほど目星がついている。」

(コ) 「とりあえず、目の前のことから片づけるという方針です。」

(鬼) 「初めは最近ニュースでしている、通り魔からだ。」

(井) 「危くない？」

(鬼) 「確かに危ない。そこで、今回は俺、登、藍で動く。」

(佐) 「留守番しとけと言ったこと？」

(藍) 「お願いします。」

(鬼) 「井練、佐藤にはここでコールの話を聞いて動いてくれ。」

(井) 「解った!!」

(佐) 「しょうがない。」

全員の了解が取れた上で、今後の動きについて話した。

#011：多数決ほど人が流されやすい物はない（後書き）

今回は殺人鬼編第一話でした。今野の展開については粗方決まっています。うつつのが大変……。今後ともご盛況お願いします。今回はたぶん捜査が始まると思います。前みたいにビシッと次回予告がしたいです。

#012：残業代は小説家がない（前書き）

試験前でもがんばります。

#012：残業代は小説家はない

5月12日

鬼帝宅会議室（ナレ：藍）

みんな、真剣に鬼帝さんの話を聞いていた。

（鬼）「とりあえず、明日から。コール、そっちを頼んだ。」

（登）「実際聞き込みからかな。」

（藍）「そうだね。」

その日は皆さん自宅に帰るため、7時には解散した。

そして私は今ドンちゃんと、がつちり腕を組んで歩いている。

（登）「あまり、ベタベタしないでほしいんだけど。」

（藍）「夜道をエスコートしてよ。」

（登）「はぁ・・・。」

（藍）「今度、坂本さんのラーメン屋さんに行かない？エディさんも誘って。」

（登）「確かに、坂本さんのラーメンはおいしいからなあ。この仕事が終われば行くか？」

（藍）「うん！！」

何も無いこの時間が好き。ドンちゃんとひっついていて時間が好き。戦っている自分じゃない姿が好き。

5月13日

事件現場周辺住宅街（ナレ：登）

本日、学校が休みのため朝から、聞き込みに回っていた。

そして、約束の時間になったため公園へ一回集合した。

（鬼）「こちらは全然ダメだ。」

（登）「無理だなあ。」

（藍）「こちらも全く。」

情報は何も得ることが出来ず、鬼帝の家に戻った。

鬼帝宅（ナレ：鬼）

帰るとそこにはとてつもない光景が広がってた。

（鬼）「コール、調子はどうだ？」

（コ）「見ていただければ解りますように、順調です。」

そこには目を鬼にして、パソコンのキーボード高速でうつ、佐藤さんがいた。

（佐）「資料がなんぼのもんじゃー！！！！！」

奥では、本棚へキレイに本を並べている井練さんがいた。

（井）「戌流ー！！並べ終わったよ。」

（鬼）「ありがとう。」

（藍）「鬼帝さん、これあなたが昔、必死でそろえた資料？」

（鬼）「ああ、保存状態が悪い奴はデータにするため、佐藤ががんばっているわけ。」

すると、佐藤さんが叫んだ。

（佐）「これで終わりだー！！！！エンターー！！！！！」

「バシツツツ！！！」

相当がんばったのだろう。息を整えていた。

（鬼）「さて本日はここまでにして、解散。」

そして、佐藤は目の前の家に、暁星とシャンは自宅へ、井練は俺が護衛しながら帰った。

帰り道、暁星達と途中まで一緒に帰るべく、また、事件現場の確認を含めて例の住宅街を通っていた。事件現場付近に来るとあるにおいがした。

（藍）「何か匂わない？」

すると少しばかり、眉にしわを寄せて、糸目のまま答えた。

（登）「ああ、血の臭いだ。」

（井）「そりゃあ、この間だったから、残っているやつでしょ？」

（鬼）「確かにそうだが、この臭いは……………」

（登）「まさかだと思っが……………」

(鬼) 「まさかだろうな。」

(井) 「何のことだか解らないのですが？」

その時だった、後ろの方から血の滴る音がした。

(鬼) 「あいつも日本にいるのか。」

(藍) 「一番居てほしくないですね。」

三人供、かまえる。

(鬼) 「由井。今から出てくるやつはご厄介野郎だ。家に早く行け。」

(井) 「うん。」

すると彼女は、家に向かって走り出した。

(?) 「生ぬるいねえ。」

(登) 「そんな死臭ばかりじゃあ、日本でも動きにくいだろう。」

(?) 「おかげさまで。とりあえず、うるさそうなのは、処分したい。」

(鬼) 「キメジ・ハーディー。」

(八) 「フルネームで覚えていてくれるとは。てっきり、コードナンバーだけかと。」

(藍) 「キラーズ？。不死の四番。」

影の中から、出てきた。茶髪。少しパーマ。青の目。彼を見るたびに死を感じる。

(八) 「また一段と美人になって。」

(鬼) 「今回の事件はお前の仕業らしいな。」

(八) 「上からの話でねえ。とりあえず、その美人さんもらっていくよ。」

(登) 「ふざけるな!!!」

暁星が前に出た。それと同時に回し蹴りをハーディーの首に入れた。

(八) 「痛いなあ。それが効かないことぐらい知っているでしょ。」
全然びくともしてなかった。

(八) 「邪魔。」

そして、足をつかみ横のブロック塀に投げつけた。

(藍) 「よくもー！ー！！！」

(鬼) 「前が出るな！！！」

言うのが遅かった。シャンは暁星同様回し蹴りを入れたがびくともせず。足を捕まれ、下にたたきつけて、首もとへ手刀を入れ気絶させた。

(八) 「君もさよなら。」

こちらが銃を抜く前に足下を撃たれた。

(八) 「ロイヤル。精々もがけよ。」

(鬼) 「貴様！！！」

その時、暁星がハーディーの足を捕まえた。

(登) 「おめいさん、一つ忘れてる。おれもお前と同じ体つてことを！！！」

(八) 「鋼鉄の8番でしたね。それほど死にたい？お望み道理に。」

ハーディーが銃をかまえたのを見て、自分の残った力で引き金を引き銃を持つ右手に当てた。

「バキューン」

銃が空を舞う。

(八) 「あーあ。これじゃあ新調しなきゃなあ。精々ガンバレ。」

そう言い、暁星を蹴り飛ばし、闇の中へ去っていった。

#012：残業代は小説家がない（後書き）

シリアスな展開になってきました。そして、なんと藍さん拉致されましたね。さて、戦神の方は順調に四月に向けて準備が整いつつあります。また、最近滞っているガン・トライアルも近日中にでも次話を書き上げたいと思います。今後ともよろしくお願いします。

#013：言つこと聞かないのは人間の性（前書き）

シリアス編は書くと心も暗くなる。

#013：言うこと聞かないのは人間の性

恵出伊病院（ナレ：井）

私は認めたくなかった。あの戊流が……。佐藤と病院の廊下を走る。

病室が近づくに連れ涙がこみ上げてくる。

病室の前に立ち、思いつきり戸を開けた。

「ガラガラガラガラ」

（井）「戊流！！」

そこには、点滴を打つ戊流と登が寝ていて、そして横に白衣を着たエディさんがいた。

（エ）「久しぶり。」

（佐）「なぜあなたが？」

（エ）「言わなかったっけ？武器商だけじゃあこの日本では生きていけないから医師もやってるって。」

（井）「それより、容態は？」

（エ）「とりあえず命に別状無し。さすが元キラーズメンバーだよ。傷も急所じゃない。」

（佐）「じゃあ大丈夫なんですね？」

（エ）「ああ。だが、三日は動くなと言っといてくれ。絶対、傷が治るまでに動き出すから。」

（井）「はい。」

（佐）「藍さんは？」

すると、急にエディさんの顔が暗くなった。

（エ）「私が駆けつけたときにはもう居なかった。」

（佐）「まさか、連れ去られた？」

（エ）「可能性がある。この二人にはさっさと起きてもらわないと。」

「
そう言い、エディさんは病室から出て行った。」

(佐)「由井。良かったじゃん。あー、ジュース買ってくるね。」
私を励ますために、佐藤はそんなことを言っ、エディさんの後に
続いて出て行った。

すると戌流が起きた。

(井)「戌流!!」

思わず、目の中にたまっていた涙を流しながら抱きついた。

(鬼)「すまない。俺がふがないばかりに。」

(井)「とりあえず生きていてくれてありがとう。」

(鬼)「だが、シャンを連れ去られた。一番、暁星の方が苦しいだ
ろう。」

そう言い、戌流は登に目を向けた。

(井)「これからどうするの?」

(鬼)「絶対三日は動くなとエディに伝えてくれと言われたかもし
れないが動くよ。」

(井)「私も行く。」

真剣なまなざしで見つめた。

(鬼)「・・・来るなと言っても来るなあ。その顔じゃあ。」

(佐)「私も行かせてもらうよ。」

ジュースを持った佐藤がそこにいた。

(鬼)「しょうがないな。」

(登)「当の本人おいていくかい?」

登も起きてきた。

(鬼)「後で説教だな。」

(登)「まあ、嫌だけど。」

二人は立ち上がり、点滴を外して服を着替えた。

そして、私たちは病院を飛び出した。

(エ)「昔と変わらないかあ。」

車内(ナレ:鬼)

病院を出ると同時にコールの車を呼んでそこへ乗った。

そして、シヤンの救難信号を頼りに某廃墟へ向かっていた。

(鬼) 「今回はシヤンの救出だ。必要な武器はもう乗せてある。井練と佐藤は無線とマシンガンだ。」

(佐) 「引き金は引かなくても良いよねえ。」

(鬼) 「引かなくて良い。ただ、持っているだけで大丈夫だ。犯罪者にお前ら二人を成らせはしない。」

(井) 「登は何使うの?」

(鬼) 「こいつにはラ・・・」

(登) 「いや、何もいらぬ。素手でやる。」

(鬼) 「まさかやるのか?」

(登) 「封印したが今回は仕方ない。」

(井) 「何するの?」

(鬼) 「それは、言うよりも見た方が早い。」

(コ) 「つきましたぞ。」

そこは、古びれた工場跡地だった。

(鬼) 「行くか。」

廃墟内(ナレ:藍)

意識がなくなつて次に見たのはこの月明かりが少しさす天井。足と手には枷がはめられていて動けない。

(藍) 「暁星・・・。」

するとそこにハーディーと見知らぬ男がいた。

(ハ) 「お目覚めかな?」

(男) 「これが賞金首でもとキラーズメンバーかあ。金儲けだ。」

(藍) 「私をどうする?」

(ハ) 「餌だよ。この救難信号、スイッチ入れさせてもらったから。」

ハーディーは救難信号発生装置を持っていた。

(男) 「これでまた、金が入る。あははははは!!!!!!」

その時、絶望という物を初めて知った。そしてまた私は意識を失っ

#013：言うこと聞かないのは人間の性（後書き）

今回、キラーズメンバーは賞金首であることが判明しましたね。はたしてこの後どうなるのか。次回は、乗り込みます。

#014：夜風の音は物寂しい（前書き）

睡眠時間が四時間切りました。

#014：夜風の音は物寂しい

某廃墟内（ナレ：作）

暗い廊下を進んでいく。

（鬼）「やけに何もいないなあ。」

（井）「ホントに誰もいない。」

すると、登が叫んだ。

（登）「そこだー！！」

足下に落ちていた石を拾い暗闇の中に投げた。するとばさりという音がした。

（鬼）「見張りだな。」

落ちてきた見張りは意識を失っていた。

奥の広場へと進んだ。すると囲まれたらしい。

（？）「おいでなすったー！！」

（？）「これで人を殺せれるー！！」

ざっと、十人武器を持つ悪人面がならでいた。

（鬼）「死ぬ。」

低く静で重い声で言った。

「バキューンバキューン……」

鬼帝はマガジンを取り替える事無く、つまり一発も外さずに全員をやったのであった。

増悪の念のこもったその顔は不動明王のごとく怒りに満ちていた。

廊下を進むに連れて、待ち伏せていたのが出てくるが虫のごとく消していった。

（鬼）「本的には暁星に任せる。」

（登）「だから他をやらせるでしょ？」

（鬼）「ああ。」

佐藤と井練はただ後ろをついて行くのみ。

(佐)「やすみなよ。体が重そう。」

まだ、二人ともダメージが残っていた。しかしそんなことを言っている暇はない。

(鬼)「時間がない。」

そう言い、鬼帝と登は先を歩く。

(鬼)「言い忘れてたが、由井も佐藤も俺らの顔を見ない方が良い。」

(登)「ひどい顔だから。」

広場の先を進むと、目の前には扉があった。

我慢しきれずに登が蹴り開けた。

「バコーン」

奥にはいつもの美しい藍ではなく、衰弱した藍がいた。四人とも駆け寄る。

(登)「生きてるか？返事しろ!!」

目をつぶっていた藍が目を覚ます。

(藍)「ドンちゃん……。これ……。畏……。」

そう言い、また眠りの中へ藍は入っていった。

登の目つきが変わる。いつもの優しい糸目から、目を見開き、鉄のように冷たい機械のような瞳をあらわにした。

(登)「戊流、やっぱりあれ使うよ。」

(鬼)「そこに隠れているやつにやってやれ。」

入ってきた扉とは別の扉から、男が出てきた。

(カ)「君らが何が出る？」

(鬼)「ハーディーの雇い主か!!」

(登)「あいつは金があればどちらにも付くからなあ。」

(カ)「さて、賞金首が三人。笑いが止まらんわ。」

(佐)「この人って、メキシカンマフィアのセカンド。」

(鬼)「その通りだ。カゴン・メシア。国際手配を受けている賞金

8000万ドルの男だ。」

(登)「CIAもFBIも手を焼いてる。」

(力)「まあ、どのみちお前らは死ぬのだからな!!」

カゴンが銃を手に取る。すかさず、鬼帝は佐藤と井練を登は藍を抱えて壁に隠れる。

「バキューン」

(力)「隠れても無駄だ。」

壁のところで鬼帝と登は話す。

(登)「シヤンを頼む。」

(鬼)「銃だけを弾く。あとは任せる。」

鬼帝は左手の銃でカゴンの銃を狙った。

「バキューン」

(力)「くそー!! あいつらめ。」

壁の中から、登が出る。

(登)「カゴン。今から死ぬ人のみ見られる物を見せてやる。」

(力)「貴様の師、莉撰帝リ・センテイはわしが素手でやったのだから貴様が勝

てるはず無かるう。」

壁の影で鬼帝はその会話を見ていた。

(井)「登さんの蹴りが上手いのは藍さんから教わったからでしょ。でも殴った方が強そうだけどなあ。何で殴らないの?」

(鬼)「正確には藍は登に教わった。そして、殴らないんじゃない。腕を使いたくないんだ。」

(佐)「どういう事?」

(鬼)「それはあいつが今からすることを見れば解る。そして、鋼鉄の異名も。」

再び、登とカゴンの会話。

(登)「あんたは完全に二つ勘違いしている。一つは、我が師は病気で弱っていたこと。もう一つは、今からするのは蹴りではない。」

(力)「貴様まさか!!」

(登)「そうさ。禁拳・・・八卦急所拳はもう習得した。」

(力)「貴様、わしが探していた物を!!」

(登)「先には見つけていない。第一、莉撰帝の拳法書は存在しない。我が師の拳法は自然の導きから出来る物だ!!」

(力)「知るかー!!」

カゴンが動いた。殴りにかかる。

それを見るやいなや、登は両手を前後に出し太極図を足のつま先で書いた。

(力)「くだらん事が命取りだと言うことも知らんのか!!」

あたりそうになった瞬間、登はカゴンの突き出した拳の方向を前に出した右手でそらし、左手でみぞおちを突いた。

(力)「ぐは!!」

一度、後ろへカゴンは下がる。

(登)「八卦急所拳は己の腕、指先を鋼のように固くすることから修行が始まる。」

(力)「わしの前では意味をなさん!!」

(登)「今突いたのは、内蔵に最も負荷のかかる場所だ。そしてこの腕は人体なら貫通する。」

(力)「でたらめを!!」

(登)「あなたは運が良い。銃の弾でなく、この技で死ねるのだから。」

カゴンはしゃべりかけるが、もう関係なかった。人体の各急所点を確実に登は突く。

(力)「うわあああああ!!!!」

体の至る所から出血していた。

壁の影で鬼帝がしゃべっていた。

(鬼)「あいつは、昔あの技で多くの人を死なせたことから、あの技を封印した。」

(井)「まるで鋼の刃……」

(佐)「あの細い身で……」

(鬼)「そして、あいつの痛点はほとんど人体実験で消された。だ

からあんな事が出来る。」

その時、藍が意識を取り戻した。

(藍) 「皆さん……。」

(佐) 「藍さん!!」

(井) 「体大丈夫ですか!？」

それに気付き、登も元の糸目に戻って近寄り藍の横で膝を突き、寝ている藍に顔を近寄せる。

(登) 「昔の約束破ってしまった。あのとき助けられなかった。シヤン、ごめん。」

すると、弱々しくも藍は戸の首に腕を回す。

(藍) 「あなたが生きていてくれるだけで良い。約束なんて良い。これだけで十分。」

(登) 「ホントにすまん……。」

今聞こえるのは二人の泣き声と風邪の音のみ。

#014：夜風の音は物寂しい（後書き）

救出できました。登の見せ場が書いて良かったです。さて次回は藍さんを慰める登のお話。甘めです。

#015…心のよりどころは布団の中のように暖かい(前書き)

ダブルヘッター！！…しんどいよー！！…

#015：心のよりどころは布団の中のように暖かい

5月15日

恵出伊病院（ナレ：鬼）

今、鬼の前にいます。ホントの鬼が目の前にいる。

（エ）「患者が完治もせずにごく歩いてんだー！！」

（鬼）（登）「すみません。」

シヤンの方は体も落ち着き、けがの治りも良い。しかし、あれから誰にも口をきかない。

（エ）「とにかく、寝ておればいいのに・・・鬼帝、聞いてるか？」

（鬼）「ふぁい?!?!」

（エ）「メスを頭に刺すぞコラア！！・・・登、行ってやんな。彼女のところへ。」

（登）「しかし、今回のミスは・・・。」

（エ）「つべこべ言ってるじゃあない！！心の病気は安心できる人とするのが良いんだよ！！」

そう言い、エディは登を病室から外へ放り投げた。

（エ）「鬼帝、ちよつくら話がある。」

（鬼）「・・・？」

（エ）「やつぱり、裏で賞金首になってたよ。」

（鬼）「額は？」

（エ）「藍が2000万ドル、登が3500万ドル、そしてお前さんとハーディーが9000万ドル。米ドルで裏レートだ。お前さん達が最後にした仕事がどうも原因で賞金首になってるらしい。」

（鬼）「警察の方は？」

（エ）「今回のことは事故で処理するみたいだ。メキシカンマフィアのセカンドが死んだんだから、公安が黙っていないと思うがいつがなだめるだろう。」

（鬼）「あそこにも挨拶に行かなきゃなあ。」

病室をノックする音が聞こえた。

「コンコン」

(佐) 「失礼しまーす。」

(井) 「戌流!！」

井練が飛びついてくる。

(鬼) 「傷にしてみるのだが。」

(井) 「ごめん。」

(佐) 「エディさん、藍さんどうですか?」

(エ) 「心の傷の方が心配だけど、どうにかなるでしょ。」

藍の病室前(ナレ:登)

どんな顔をすればいいのか解らない。しかし、何もしていないよりはマシと思いいノックして病室に入った。

(登) 「シャン、入るぞ。」

(藍) 「……。」

シャンは、窓から外を見ていた。返事する気配がない。近寄って、ベット横のいすに座る。

(登) 「ほんとに、悪かった。自分のふがいなさに腹が立つ。」

(藍) 「……ごめん。」

訳が分からなかった。藍が謝ることは何もないはずなのに。

(登) 「何で謝る?」

(藍) 「私、言われたの。元キラーズメンバーはこんな物かって。

自分が弱くなっていることを突きつけられて、シヨックだった。だから、お願い!私を鍛えて!」

頭を動かす前に体が動きシャンを抱きしめていた。

(登) 「シャン。そうやっていつも自分を追い込んできたんだ。たまには俺に寄りかかってくれ。」

(藍) 「そんなことしたら、暁星に迷惑が……。」

さらに抱きしめていた。

(登) 「それは違う。頼り合うからこそ夫婦何じゃないか。そんな

んじゃあ、嫁になれないぞ。」

悪戯っぽく言い、腕をゆるめて向かい合う。

(藍)「もう・・・ずるい。」

それから熱く唇を重ねていた。

こんな事で気が晴れるのならいつでも。

#015…心のよりどころは布団の中のように暖かい（後書き）

とりあえず、シリアス編完結です。次回からの予定が立っていないのですがたぶん、警察のところでもしよこによしそつです。あと、お便り等、待っています。

#016：オーラを見分けるのが社会で生き残る術でもある（前書き）

前梓のここで、いろいろやってきたけどホントにマンガの単行本の作者の一言的な感じでやっています。

#016：オーラを見分けるのが社会で生き残る術でもある

鬼帝宅（ナレ：鬼）

先日のこともあり、一週間臨時休校となっている。

そして、今日はつかいな人からの手紙から始まる。

内容は後ほどとして、今後ともお世話になる人だから挨拶に行くことにした。

一人だと思っていたのだが、行く途中、由井や佐藤、暁星にシャンといつものメンバーがそろってしまった。

（佐）「どこ行くの？」

（鬼）「警察署に。」

（井）「戌流。とうとうばれちゃったのね。でも、私は刑務所から出てくるのを待ち続けるから！！」
涙ながらに言われた。

確かにそれなりのことをやっていますけど……。

（鬼）「由井、違うから。今から投獄されに行くのじゃあ無いから。」

（登）「楓姉さんにだろ。」

（藍）「楓姉さん元気ですかねえ。」

そう今回、会いに行くのは三十路前にして署長を務める、山本楓に会いに行くのだ。

（井）「どんな人？」

（鬼）「手紙見ればだいたい解ると思う。」

そう言っつて、朝届いた手紙を取り出した。

鬼帝戌流様へ

お元気ですか？私は疲労がたまりまくっています。

こちらに来るのなら、早く言ってくれば良かったのに。

最近、ごた事が多いですがあなたがやったのですか？

私の睡眠時間を返してください。さもないと、撃ちます。
今度こちらに寄ってください。

山本楓より

(佐) 「何か、危なそう。」

(鬼) 「まあ、あの人がいろいろと俺たちの仕事について、責任持
つてくれているからね。」

(井) 「黙認してくれているの？大丈夫なの？」

(鬼) 「大丈夫らしい。」

(佐) 「女署長なんてあこがれるなあ。」

そんなことを言っていると、道前署に着いた。

受付で手紙を出すとすぐに通してくれた。

最上階へと案内され、署長室の中へ入った。

(鬼) 「お久しぶりです。」

奥のいすに楓さんは座っていた。

(楓) 「帰って来ているなら、声を掛けてよ。」

昔と変わらず、キャリアウーマンとしてのオーラは健在であった。

(鬼) 「とりあえず、後ろにいるのが今回のメンバー。」

(楓) 「暁星とシャンちゃんはお久しぶり。後の二人は？」

(鬼) 「うちの学校の生徒だ。ちなみに、暁星とシャンも。」

すると、楓さんは眉を寄せた。

(楓) 「一般市民を巻き込むのはいただけいなあ。」

(佐) 「覚悟は出来ています!!」

(井) 「私も!!」

すると、楓さんは元の表情に戻った。

(楓) 「聞きそうにない顔だ。これじゃあ、戊流も断れないわけだ。
解った、手配をしておく。」

(鬼) 「ありがとう。」

しばらく話をした後、俺以外は用事があるため先に帰った。

全員がいなくなると待っていましたと言わんばかりに楓さんが寄ってきた。

(楓) 「これで気楽に話せる。」

(鬼) 「何か言いたげですねえ。」

(楓) 「よくわかりで。実はカゴンなんだけど、公安が喜んでいい。だけど・・・」

(鬼) 「だけど？」

楓さんは一度うつむき、考えてから話し出した。

(楓) 「あそこ、若干、気付いてきたみたい。二年前の時のあなた達が今でも動いていることを。」

(鬼) 「そこをお願いできるのが、あなたなんですから。」

(楓) 「しょうがないなあ。」

(鬼) 「賞金首のことも何か解った？」

(楓) 「どこが仕切っているか、結局解らなかった。クライアントさえ見つかればいいのにね。」

(鬼) 「見つかったとしても、オオカミのしっぽじゃあ踏んだらこちらの終わり。さて、どうするか。」

(楓) 「少しずつ裏で二年前の資料をあらってみようと思うの。」

(鬼) 「頼みます。」

その後、「つまらない物だけど食べていく？」と楓さんに差し出されたまんじゅうで腹をこわしたのは後々まで引っ張ることになる。

#016：オーラを見分けるのが社会で生き残る術でもある（後書き）

今回も前回引き続き短くなってしまいました。しかし、次回は長い
です。美人が二名登場！！それも誰かさんのいとこだとか何とか。
また、感想、お便り待ってます。

#017：睡魔退治にはコーヒーが最適（前書き）

今月から毎週土曜日更新です。

やっと軌道に乗りました。

長かったなあ。

#017：睡魔退治にはコーヒーが最適

鬼帝宅（ナレ：鬼）

引き続き臨時休業中。本日は俺の家に由井が来ている。由井の提案により買い物に出かける予定であったが、あいにくの雨。コールはじいちゃんとゴルフに行つて今日は帰つてこない。今日は何もないから帰つたらと言つた。すると、由井は何が何でも俺と離れたくないらしく、かなり手を焼いた。そこで、本日泊まらせてあげることにより合意したのだった。なぜだろう、嫌な予感しかない。

そして今、二人でお昼時のニュースを見ている。

（鬼）「いつまで、首に巻き付いているのだ？」

（井）「私の夫になるまで。」

（鬼）「シヤンの一途な所がうつつたのか？」

（井）「もう、一人の夜は寂しい。」

こんな事を言っているから、確実に今夜は帰らないだろう。すると、インターホンが鳴つた。

「ピーンポーン」

（鬼）「とりあえず、出たいから、離れて？」

（井）「嫌。」

しょうがなく、首に巻き付けたまま（正確には巻き付かれたまま）玄関に行った。

「ガチャ」

（鬼）「どなたですかー。」

そこには、双子と思われるきれいな二十代ぐらいの女性が二人いた。おれの顔の後ろから、由井が顔を「ひよこっ」とだしたとたん、由井が叫んだ。

（井）「あー！ー！！由来お姉ちゃん！！由里お姉ちゃん！！」

（里）「久しぶり！！」

（来）「鬼帝さん・・・初めまして。」

(鬼) 「とりあえず、中へ。」

(里) 「あつ！この子が彼氏！？なかなかじゃん！！仲も良いみたいだし。私も由井の首に！！！」

(来) 「私も。」

何だろう。端から見れば、曲芸だよ。べつに俺はいろいろと昔、訓練したから首が強いのは良いとして、由井はどこからそんな力が出るのだろうか。

そして今日は熱があるのだろうか、ナレーションの調子が悪いなあ。柄でもないことを言っているような気がする。

その状態でリビングまで行き、ソファへ四人は座った。

(鬼) 「とりあえず聞くが、あの人達、誰？姉妹？」

(井) 「正確にはいっとこ。昔っからよく遊んでいたから、姉妹どうせんなの。」

何となく先が読めた。この後、大変なことになるなあ。

(里) 「初めました。井練由里と言います。よろしく。」

第一印象は明るい元気な人、と言っておこつ。

(来) 「初めまして。井練由来と言います。あー、よろしく、お願いします。」

第一印象はおしとやかで礼儀正しい人、と言っておこつ。

外見についてはしっかり語っておかないと。

(井) 「今日は何でここに？」

(里) 「由井を引き取りに来たの。大学を今年の春に卒業して、これから働くの。で、今まで寂しい思いをしてきた由井を今からでも一緒に暮らして家族であることの喜びを思い出してほしいの。あの家も売って、私たちと一緒に暮らさない？」

ここで、皆さん考えただろう。なぜこの二人はこの家に由井がいると解ったのか。

(鬼) 「ちよつと、取り込み中失礼ですけど、どうしてここに由井がいると？」

(里) 「由井の家に行ったら、誰もいなくて、街を歩いていたら、

佐藤さんにあつて。それで聞いたらここだつて。」

(鬼)「なるほどね。」

(里)「どう?」

(井)「あの家には悲しい思い出しかないから、売ることには賛成。これで悲しい過去ともおさらば。でも、私は鬼帝と一緒に暮らします!」

なんとも、やつかないことを言う。俺らまだ中二なのに・・・すると、物静かに聞いていた由里さんが話し出した。

(来)「それは、良くないと思う。鬼帝さんに迷惑かかるし。まだ、同居は早いと思う。」

恋人として、言つて良いのか解らないが、この年で同居はまずい。

(一部、中国から来たお二方を除く)

(鬼)「由井。お姉さん達の言う通りにしたら?別にあえなくなる訳じゃない。」

(井)「う〜ん・・・」

(来)「しかも家が近くなりますし。」

うん?何か変なことが聞こえたような。家が近い?ちょっとまで。こちら辺に井練と書いてある家は見たこと無いぞ。

(里)「そうだよ。隣だよ、隣!」

まで、まで、まで。隣は喫茶店だぞ。しかもいつもシャッターが閉まっている。

名前は確か・・・

(井)「あのお店復活させるの?なら・・・乗った。人でもいるだろうし、新婚生活に向けて花嫁修業も出来るし。」

何か横で言ってるけど、それより名前は・・・

(来)「では、鬼帝さんというわけで、これから喫茶店Red Moonをよろしくお願いします。」

そうそう、Red Moon。そうか、確かあの場所の持ち主は、権利書地図で見たら・・・井練だ・・・。何で気づかなかつたのだろう。不覚だ。

(井)「同居は、ちょっとだけ辛抱してね。その代わり、今夜は泊めて?」

さすがに、そこは譲らないのね。とにもかくにも、井練家のごた事が片づいて良かった。なぜ他人の家出、話し合うかについては目をつぶろう。

そこで思い出したのだが、やはりこの二人には俺が裏の世界へ由井を引き込んでしまったことについて伝えるべきであると思う。

(鬼)「お二人にお話があります。」

(里)「何?まさか、結婚させてください?」

人をからかうことが非常に上手いとこのとき思ってしまった。

(鬼)「いえ。そうではないのですが、実はある事件に由井を巻き込んでしまったのです。そして私は昔……暗殺組織にいた裏の人間なんです。」

これを機に由井は俺から離れて、大切な家族の時間を過ごししてほしいと思う。恋人として、最低なのかもしれない。しかし、幸せに暮らせるように努めるのは恋人の仕事だと思う。そこで決断したのだ。すると、二人の顔が一気に青くなる。

(里)「ほんと?」

(井)「そうなの。でも、戊流は悪くない。私たちの仇をとってくれたし。」

二人は目を合わせ、一時的に驚いていた。

(来)「本当ですか?ダブルとか言う男を葬って下さったのはあなたなのですか?」

(鬼)「私が確かに葬りました。」

すると、由里さんと由来さんが同時に頭を下げた。下には涙のしずくが落ちていた。

(里)「ありがとうございます。本当にありがとうございます。」

(来)「実は、あの事件に私達の両親も巻き込まれて死にました。」

(鬼)「すみません。由井を巻き込んでしまって。」

(里)「そんなことを言わないでください。むしろ感謝してます。」

(来) 「良かったね・・・由井。」

(井) 「うん。」

(鬼) 「しかし・・・」

(来) 「では、次のようにしていただけませんか？」

(鬼) 「と言いますと？」

(来) 「私たち三人をこれからも守ってください。」

(里) 「ナイスアイデア。」

本当にこれで良いのか解らない。これを機にと思っていたのだが。すると、由井が雰囲気を変えるように話し出した。

(井) 「お姉ちゃん達は弟がほしただけでしょ。私たちがくっつけば弟になるんだから。」

さすが、由井と思いつつ、一方では三人は結構チームワークがすごいと思う。

(里) 「弟かあ。これからよろしく。戌流。」

(来) 「よろしくお願いします。戌流。」

そう言つて二人は首に抱きついてきた。この家系は首が好きなのか？

(井) 「あー！！お姉ちゃん達ずるい！！私の場所を空けてよう！！」

こんなに家族つて言うものが暖かい物なんだと、このとき初めて知つた。いや、思い出せたのかもしれない。

そして、由来さんと由里さんは帰る用意をし、玄関に行った。

(里) 「じゃあね。戌流クン、夜は遠慮するなよ。襲っちゃえ。」

(鬼) 「水面下ぎりぎりの発言はやめてください。それに、襲いません。」

(井) 「ちょっとショックだなあ。」

完全にシヤンの一途さがうつっている。

(来) 「コーヒーでも飲みに来てください。」

(鬼) 「ありがとうございます。」

そうして二人は帰っていった。

夜

由井には悪いが眠たくなる雰囲気を極限まで料理等で醸しだし、客間で寝てもらった。

自分は自室に鍵を掛けて寝た。

安心はしていないが、これで大丈夫だろう。シャンなら、扉を破ってくるって暁星は言っていたなあ。

#017：睡魔退治にはコーヒーが最適（後書き）

さて、なかなか美人さんがたくさん出てきていますが次回は喫茶店の開店日の話です。ウエーターをしているのははたして、誰なのか。また、感想等待着ってまーす。

#018：喫茶店は学生にとって一番の社会学習の場（前書き）

投稿する暇を私に下さい。

#018：喫茶店は学生にとって一番の社会学習の場

生徒会室（ナレ：佐）

本日は生徒会室で来たる「道前夏の陣」、いわゆる夏の体育祭についての話し合いだった。体育祭と言っても正式な体育祭は秋にあるため、プール等を使った軽い物である。しかし、これは表場の姿。実は裏ではいろいろな権力争い等があり、特に同じ学年の他クラスとは攻防が激しい。そして、この道前夏の陣が初めの大会であるため、全員ピリピリしているのである。

（武）「つーことで、今回はトライアスロンをしようと思う。」

（濱）「ルートはどうやって確保するの？」

（久）「校内のルートで十分足ります。」

（岡）「経費はどこ持ちですかあ？」

まあ、こんな感じで話し合いが進められているわけだ。だが、ここに一人だけ来ていない者がいる。何も連絡がないのが心配ではある。

喫茶店 Red Moon（ナレ：井）

本日より新装開店！！ほこりだらけであった店もぴかぴかになった。そして開店。まずまずのにぎわいだった。

（里）「戊流。悪いねえ。手伝ってもらって。」

（井）「由来姉さん。モカ三つ、カプチーノ四つ。」

（来）「これを五番テーブルにお願い。」

（鬼）「わかりました。」

戊流には生徒会を休んで手伝ってもらっている。本当は大丈夫だと思っていたんだけど、あまりにもたくさんお客さんが来て、人手不足。そこで手伝ってもらっている。四人ともおそろいのエプロンをして、由来姉さんと由里姉さんはカウンターでコーヒークリームを作ったりコップを洗ったりするのを交互にしている、私と戊流はウエー

ター。

(鬼) 「外、列が出来てますよ。」

(里) 「稼ぎ時、稼ぎ時！」

(井) 「次の方どうぞ。」

(登) 「どう？順調？」

(藍) 「ここが、日本の喫茶店ですかあ。」

登さんと藍さんであった。二人はカウンター席に座った。

(登) 「街で相当噂になってたよ。」

(藍) 「美人がいる喫茶店って言われてましたよ。」

(鬼) 「だから、列が出来ていたのかあ。」

戌流は納得した顔であった。

すると、由里姉さんがこちらに気付き、声を掛けた。

(里) 「二人とも由井達のお知り合い？」

(登) 「クラスメイトです。」

(来) 「由井、戌流。カウンターの方をやって。話しをしていて良
いから。」

(鬼) (井) 「はい。」

そう言っ、お姉ちゃん達はウエーターの仕事を私たちと変わった。

(登) 「なんか、佐藤さん怒ってましたよ。鬼帝が無断でいなくなっただって。」

(鬼) 「後で大変なことになるかも・・・。」

(藍) 「そう言えば、さっきの美人のお二方は？」

(井) 「私のいとこで、井練由里と井練由来です。」

(登) 「戌流。見分けがつけれる？」

(鬼) 「とりあえず、二人の違いは見つかった。簡単に、耳たぶにあるほくろの場所が違う。右にあるのが由里さんで、左にあるのが由来さん。」

(藍) 「かなり観察してますねえ。」

(鬼) 「昔の職業柄場しようがないことぐらい知ってるでしょう。」
その後、閉店までお客さんはたくさん入っていた。

夜

閉店した後、床を掃除して一段落入れることにした。カウンター席に四人が座っている。

(井)「今日はありがとう。戌流！」

(鬼)「どういたしまして。」

(来)「本当に助かりました。バイト代は出しますので。」

由来姉さんが立とうとしたときに、戌流が呼び止めた。

(鬼)「かまいません。好きでやったことですし。」

(来)「しかし……」

(里)「良いんじゃない。いらないうって言ってるんだし。でも、それ以外のことで私たちに頼めることがあるなら、言ってほしいな。」
戌流は少し考えた後、少し表情を軟らかくして答えた。

(鬼)「この、コーヒーをタダで毎朝、飲ませてください。代わりに、暇があればお手伝いしますのです。」

戌流が言ったことを聞いて、毎日来てくれると大はしゃぎしていた。

(里)「義理難い所は好きだなあ。私も戌流の彼女になろうかなあ。」

(来)「私も……」

(井)「ダメー！！戌流は私のだから。」

そんな雑談をしていると、ふと思い出した。

(井)「戌流。今度、海に行かない？来週から、夏休みだし。」

(鬼)「メンバーは？」

(井)「彩と藍さん、ドンちゃんで行こうよう。」

(来)「保護者がいないと危ないよ。」

過保護ですって。もう大丈夫ですから。

(里)「私たちが行ってあげる。」

(井)「お店どうするの？」

(里)「一日ぐらい閉めていても大丈夫だよ。それに、海で男の子と一緒になんて、一人だけずるいぞおー。私たちにも男をよこせー！」

「やっぱり、戊流目当てなんだ・・・。」

(井) 「戊流じゃなくても良いでしょ!!」
すると、由来お姉ちゃんが顔を赤くして言った。

(来) 「私は戊流の方が良いな。」
頭から煙が出ている。

(里) 「おやー。いつも、内気な由来がここまで言うとは。と、言うことでさあ、私たちも戊流と一緒に海に行きたいから良いでしょ?」

(井) 「う〜〜ん・・・。」

その時、黙っていた戊流が話し出した。

(鬼) 「由井。我々はまだ中学生であるから、その方が賢明だ。」

(里) 「ほらほら、戊流もこう言っている事だし。」
長い沈黙の後、深呼吸してから話した。

(井) 「わかった。いいよ!ただし、戊流に変なことをしないように。」

(里) 「そうと決まればどこに行くか考えないと。それと私たち二人にも戊流を貸してよ。」

(鬼) 「僕はものですかあ!」

こんなに楽しい夜が最近続いていることは予想にもしていなかった。神様が私たちを引き合わせてくれたのかなあ。

もし、もう一つ願いを叶えてくださるなら、この時間がずーっと続くように。

#018：喫茶店は学生にとって一番の社会学習の場（後書き）

最近、忙しくて投稿できません。そこで、来週もお休みかもしれないが、あしからず。さて、次回は道前夏の陣についてだと思おう。お楽しみに。また、感想待ち受けて、いまーす。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9675e/>

双銃

2011年10月5日06時23分発行